

大澤 聡

1978年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員を経て、現在、近畿大学文芸学部講師。専門はメディア史。各種媒体にジャーナリズムや文芸に関する批評・論文を発表。

批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇

2015年1月20日 第1刷発行

著者 おおさわ さとし
大澤 聡

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・法令印刷 カバー・半七印刷 製本・牧製本

© Satoshi Osawa 2015
ISBN 978-4-00-024522-7 Printed in Japan

図(日本複製権センター委託出版物) 本書を無断で複製複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrcc.or.jp/> E-mail jrcc_info@jrcc.or.jp

人名索引

あ行

- 裏庭篁村 124
青木陽平 223
青地農 340
青野季吉 →大伴女鳥, 金剛登も見よ
14, 30, 36, 58, 92, 107, 113, 120,
126, 134, 143, 147, 162, 164,
210, 212, 224, 225, 238, 258,
260, 261, 264, 269, 270, 280,
285, 287, 290, 295, 298, 305,
307, 309, 310, 312, 314, 325,
326, 328, 335, 336, 339
赤間啓之 316
芥川龍之介 132, 304, 318, 331
浅岡邦雄 281
浅野晃 292
浅原六朗 169, 317
麻生豊 177, 178
阿南宏 291
阿部勇 76
安部磯雄 314
阿部真之助 →名知潜も見よ 159,
177, 199, 315, 317, 319, 323, 329
阿部知二 91, 134, 135, 142, 295,
300, 309, 311
雨宮庸蔵 245, 246, 332
荒川放水 329
荒木貞夫 166, 172, 315
荒畑寒村 327
有澤廣巳 66-68, 154, 290, 313
池島重信 260, 261, 317, 336
石和浜次郎 337
石垣蟹太郎 150, 313
石川淳 293
石田佐恵子 318
石橋湛山 319
石濱知行 48, 64, 76, 77, 154, 204,
248, 254, 261, 262, 286, 287,
290, 313, 315, 336, 337
泉鏡花 304
和泉八郎 339
磯田光一 294, 311
板垣鷹徳 265
板垣直子 97, 143, 206, 244, 266,
296, 309, 325, 332, 338, 339
一木清蔵 292
伊藤金次郎 314
井東憲 127, 303
伊藤剛 319, 320
伊藤整 261, 300, 336
伊藤正徳 161, 304, 316
犬養健 312
井上準之助 52
猪俣津南雄 55, 318
白井吉見 306
宇野浩二 143, 284, 294
江口渙 318
エンゲルジング, ロルフ 241, 331
大内兵衛 318
大木惇夫 340
大草實(嵯峨信之) 306, 320, 332,
333

序章 編集批評論

- 1 商品としての言論 ギルドから市場へ
- 2 批評のマテリアリズム 課題設定
- 3 出版大衆化 円本・革命・スペクタクル
- 4 ジャーナリズム論の時代 総合雑誌史
- 5 時限性と非属領性 本書の構成

第1章 論壇時評論

- 1 論壇とはなにか 第一の課題設定
- 2 レジユメ的知性 総合雑誌の論壇時評
- 3 空間画定と再帰性 学芸欄の論壇時評
- 4 メディア論の予感 相互批評の交叉点
- 5 消滅と転生 自己準拠的なシステム

第2章 文芸時評論

- 1 問題消費の時代 第二の課題設定
- 2 アリユージョンと多重底 批評無用論争
- 3 後発者たちの憂鬱 自律した批評の誕生
- 4 複数化する宛先 文壇村という読者集団
- 5 職業としての批評 文芸批評のプロトコル

第3章 座談会論

- 1 ふたつの欲望 第三の課題設定
- 2 合評から討議へ 「新潮合評会」の変成
- 3 劇場化とロールプレイ 行動主義論争
- 4 擬態の親密圏 『文学界』の文壇政治
- 5 造語の氾濫 メディアⅡ形式の一義化

第4章 人物批評論

- 1 人物による時代診断 第四の課題設定
- 2 横断性と大衆性 普通選挙時代の批評
- 3 固有名消費 有名性生成のメカニズム
- 4 複数の表象様式 記号的身体とキャラ化
- 5 有名と匿名 現実的権威の発動

第5章 匿名批評論

- 1 スタースystem 第五の課題設定
- 2 精神か経済か フリーランサー論争
- 3 声と批評 輿論・社会化・カタルシス
- 4 責任の所在 学芸／文芸欄という例外圏
- 5 固有名化する匿名 名をめぐる四象限

終章 批評環境論

- 1 速度 編集的批評／批評的編集
- 2 総合 アカデミズムとジャーナリズム
- 3 再編 境界条件の壊乱と地殻変動
- 4 局外 いまはそれと名指されぬもの
- 5 集団 全体性はいかにして可能か

註

あとがき

人名索引

凡例

- ・ テキストは原則として初出に準拠する。月単位での前後関係を重視する。
- ・ テキストの表題類に後接した数字は掲載媒体の刊行年月を意味する。
- ・ [例] (一九三三・七) 一九三三年七月(号)に発表
- ・ テキストの詳細な書誌情報はすべて該当註に送る。
- ・ 本文中の「」は基本的に引用符として使用する。
- ・ 引用文中の「……」は引用者による省略を意味する。
- ・ 引用文中の「」は引用者による補記を示す。
- ・ 引用文中の／は原文における改行箇所を示す。
- ・ 引用に際し、原文の圏点やルビの類は基本的に省略する。

序章
編集批評論

- 1 商品としての言論 ギルドから市場へ
- 2 批評のマテリアリズム 課題設定
- 3 出版大衆化 円本・革命・スペクタクル
- 4 ジャーナリズム論の時代 総合雑誌史
- 5 時限性と非属領性 本書の構成

1 商品としての言論 ギルドから市場へ

言論でも思想でもよい。もちろん批評でも。それらの名に値する営為は日本に存在しただろうか？
——これが本書を貫く問いだ。

はなから反語として理解する向きもあろう。この一見シンプルな借問に対して、私たちはいかようにも答えることができてしまう。「言論」や「思想」、「批評」の確たる定義を持たないためだ。それだけではない。「営為」や「存在」も含意がゆらぐ。「値する」の基準も不明瞭である。この類の問いは必ず定義問題へと還元される。回答は各個別の語彙解釈に左右されるだろう。もしくは、無際限に留保がつきまとう泥のような論議へと収斂していく。どこまでも言い訳めく。それにしても、なぜ私たちはそのように歪んだかたちでしか答えを与えることができないのか。

設問を変形しよう。ひとはなぜそれを「言論」なり「批評」なりと呼ぶのか？ 何をもって「ここには批評性がある／ない」と言明しうるのか？ じつのところ、私たちの判断は経路に深く依存している。情報伝達は何らかの媒介メディアを必要とする。例外はない。その形式こそが印象の大半を決定している。とすれば、回答の確定にいたる道程はおのずと絞られる。分析は「可能性の条件」にこそむかわなければならない。

限定しよう。「文学」で考えてみる。

文芸批評家の大宅壮一は、論説「文学の時代的必然性」のなかである極論を展開している¹。一九三〇年一月の記述だ。

どんなにすぐれた作品でも、それが商品にならない限り、何等の「価値」も認められない。しかも商品にならない限り、社会的に存在することは不可能である。／＼において、従来の純藝術的基準と対立して、新しい商品的基準が発展され、それが漸次前者を圧迫し、駆逐せんとする傾向を示してゐる。

補足が必要だろう。大宅は論文「文壇ギルドの解体期」(一九二六・二二)をもつて本格的な言論活動に入った。その際、硯友社以来の徒弟制度的な「文壇」を封建社会の職能集団に見立てた。すなわち「ギルド」に——戦前期の「大宅壮一」はいまなお、まれに使用される当該標語をもつてのみかろうじて文学史上に記憶される。ここでは、「素人」／「女人」を截然と区画する「マスター」機能が優位的に作用していた。特定の人間関係が登壇を認定する。そして、「有名」になつた者同志が互に褒め合ひ、問題にし合つて「有名」を維持して行く。「有名」性と党派性の力学が文壇を存続させる。しかし、時代は既得権益の一元的な囲い込みを許容しなくなりつつあつた(すぐあとで述べるように技術革新の一掃結だ)。そこで、大宅は特権崩壊の諸兆候をつぶさに観測する。そのうえで、現象の背後に潜む要因を律儀に列挙してみせる。いまは詳細を省こう。

「文壇ギルド」に取替わったのは、数年後の大宅の論説「第三期」文壇論（一九三二・七）にしたがえば、「チャーナリズム文壇」とでも呼ぶべき空間だ。測定基準の場合は「チャーナリズム」へと移る。ジャーナリズムが極度に肥大化していた。あらゆる領域を呑み込んでいく。いまや、作家が作家たるには、「チャーナリズムから——「資本」から認められ」るほかない（大宅「文壇に対する資本の攻勢」一九二八・九）。一九三〇年前後、日本の文学場はひそかな、しかし決定的な転形期をむかえていた。それは「文壇ギルド」から「チャーナリズム文壇」へ」というシステム移行として結実する。限定された人的ネットワークによる承認から、開放された商業ジャーナリズムによる査定へ。そう要約できる。ギルドなき文壇は市場原理にゆだねられる。先の発言はこの変位のなかで捉えなおさなければ理解を誤る。もちろん、瞬時に移行したわけではない。複数の「基準」が併存する。文壇のロジックを多元複層的に構成していた。ここに転換期特有の重層性を見出しでもよい。

文学作品たちを「商品的基準」が覆い尽くす。「純藝術的基準」をフイクシヨナルに担保し続けてきた旧文壇はもはや「価値」を保証してはくれない。それどころか、「藝術的理想主義」そのものが成り立たない。圧倒的な「資本」の前に「駆逐」されてしまう（前掲「文学の時代的必然性」）。大宅は論説「バラック街の文壇を観る」（一九二九・六）のなかにこう記した。「作品は「文壇」の仲介を経ないで、消費者若くはその代表者と直接取引をしなければならなくなつた」。商業空間において読者は「消費者」として立ち現われる。「消費者」として振るまう。彼ら彼女らの眼前には「作品」が陳列されている。そう、まったく「商品」として。どれを手取るかは消費者個々の選好に依拠する——もしそうでないなら、そこには別の「基準」が並走しているといわざるをえない（何らかの外的強制力）。

選好の集中度が「市場価値」と相関する。論文「文壇ギルドの解体期」はこの語彙に「マアケット・プライス」とルビをふった。あらゆる存在が「マアケット」で測定される。金銭との「取引」の対象と化す。

シニカルで殺伐とした情景だろうか。

しかし、そこにこそ大宅の思惑はあった。かねてより、「文学といふものを特別に神聖視」する認識の解除をくりかえし遂行的に訴えていた（「事実と技術」一九二九・五）。過剰な「神聖」性を剝離せんと試みる。ことあるごとに、大宅は文学領域の仕組みを衆目に晒し出した（これは自身が随行したプロレタリア文化批評の文法を先鋭化させた帰結でもあった）。システム自体をマニュアルとしてあけすけに論じ尽くす。露悪的なまでに執拗に。そして、システムへの眼差しをも商品に組込もうとする。それゆえ、多くの顰蹙と論駁を誘った。大半は文学神聖性の護持を優先する論客による。しかしながら、その拒否反応さえも大宅の用意した枠組の強化に肅々と奉仕させられてしまっただろう。反商品的たらんとする態度までもが商品と化す。もはや誰も逃れることはできない。

この種の戦略的身振りを採ったのはなにも大宅だけではない。当時、幾人かの批評家が近似する認識を示した。大熊信行もそのひとりだ。経済学者ながら文芸事情に通暁していた。論説「文学のための経済学」（一九三三・五）のなかで次のようにいう。

娯楽の自由が原則的にゆるされてゐる社会では、ひとびとは何をえらみ、何をたのしむも自由である。文学がおもしろくなければ、文学以外の「よみもの」にうつり、そして、なほ一層気にい

つた娯楽をみいだせば、これまでの読書時間は、その方にさかれてしまふであらう。

かくのごとき消費者として読者は実在した。じつに移り気な消費者たちだ。軽薄で凡俗な。「商品としての文学」という視角が大熊の立論を規定する——大宅や大熊、後述の杉山平助らはこのチームをこぞって頻用した。消費者の可処分な時間と金銭は有限である。何にどれだけ充当するかは相対的に決定される。大熊は「時間配分」や「経済配分」の観点から読書行為を切り取った(後年、「資源配分問題」と一括することになる)。受容環境を大熊は問題にする。そこにおいて、「文学」はなんら特権性を帯びない。上位概念の「読書」も例外ではない。他の「娯楽」は商品との競合関係に組入れられる。大熊は映画や芝居、ラジオ、音楽、レヴェューなどをあげた。なべて選択肢と化す。あらゆるジャンルがフラットに並列化する世界——。大宅のいう「チャーナリズム文壇」はこうした条件を前提に成立していた。

この場合、「チャーナリズム」はかなりの割合で雑誌空間と重合する。あるいは、新聞の学芸欄や文芸欄が創出する空間と(本書では統一的に「学芸／文芸欄」と表記する)。当時、両空間は刊行リズムにおける差分を利用しあいつつ緊密な運動関係を構築していた。刊行ペースだけでは足りない。リーチ範囲の差分も強烈に意識された——「広汎な文筆的インテリゲンチヤの間に認められうるのは、主として雑誌ジャーナリズムに依存してであるが、その大衆化又は社会化といふ部面になると、雑誌はとうてい新聞の敵ではない」(青野季吉「現代ジャーナリズムと文学」一九三五・八)。複数メディアによる相互連絡の接面に単一のメガシステムが幻視される。それを母体に人工的な文壇共同体が立ちあがる。

整理しよう。「ギルド」解体はなにより文学場への参入障壁を押し下げた。そこに新たな書き手が大量流入する——この流入現象は大宅による観測報告のひとつでもあった。とすれば、彼らを回収し束ねあげる機関が要請される。「文壇ギルド」に代わる何か。そこで、雑誌や学芸／文芸欄などの各種媒体が効率的に機能した(時代背景は後述)。かくして、「チャーナリズム文壇」がメディア上に仮構される。

雑誌や学芸／文芸欄は文学の独壇場ではない。当然だ。それ以外の領域の言説も膨大に共存する。むしろそこでは、既存の学的領野を越境したハイブリッドな議論が取り交わされる。アマルガムな雑居空間を構成していた(「雑・誌」というインターフェイス)。それにともない、文脈や人員の地政学的な配置図の再編が継起する。全体として、討議のプラットフォームがそのつど形成されていく。ゆるやかに。特定の志向体系に収まりきらぬその空間は、ときに「論壇」と呼び慣わされた。ここにも「資本」は浸透する。というよりも、そもそもそれは商業ベースで起動していた。論壇は特定の人的ネットワークによる承認を初発の前提としない(大学的磁場からも一定の距離が確保された場所で出立している)。

ことは文壇や文芸領域に限定された問題ではありえない。言論全般が市場に流通する。とすれば、私たちに必要なのは、たとえば「論壇」と「文壇」を同一平面で解析するような言葉や枠組だ。中井正一「「壇」の解体」(一九三二・一)は、「壇」(文壇、画壇、歌壇、俳壇、論壇……)のメカニズムを一元的に説明し尽くそうとしている。すなわち、あらゆる「壇」は「不安」への「防衛」を起点とする。[「藝術的不安」]だけではない。むしろ、それは「第二次的不安」にすぎない。「経済的不安」とい

う「真の一次的不安」に促され生成する（「不安」は一九三〇年代のバズワードだった）。してみれば、「壇」が「沈滞」「解体」した先はあきらかだ。中井は「企業的言葉」と「藝術なるやゝ神聖なる言葉」との「組合せ」で整理できるといふ（「文壇の性格」一九三二・一）。「藝術の売上のレディーモード性、藝術の売上の線香性、幫間性、落語的被注文性、藝術の速力化、合理化、大量生産化」といった方向性は不可避だ、と。大宅のいう「チャーナリズム文壇」の諸特性の一面が表現されている。

批評にせよ思想にせよ、まずは物理的なパッケージをまとう。商品としての外装だ。そのうえで、消費者⇨読者に広く供される。とうぜん、他の言語商品や情報商品との競争に晒されるだろう。それにとどまらない。文学を事例に述べたとおりだ。消費者の時間や金銭を他種サービス群と争奪する（ラジオや映画などのニューメディアは脅威と映った）。ここでは機能的に等価な経済現象として併置される。言論は「商品的基準」のもと否応なく査定される。思想や創作を覆った神聖性もオプションのひとつになりさがる。絶対的には機能しない（私たちは「企業的言葉」を軽視すべきではない）。

仮にこの商品⇨市場性を否定するならば、冒頭の問いはこう回答されなければならない——「存在しなかった」、と。だが、それは大宅のいう「純藝術的基準」が専制する世界でしかない。商品としての位相は言論や作品に拭いがたくつきまとう。こうした端的な被拘束性を忘れてはならない。これは自明だ。しかし、等閑にふされる。あまりの自明さゆえに。

疑う余地のないこの条件を私たちの考察の出発点に定礎しよう。検討されるべきは言論の存在形式だ。

2 批評のマテリアリズム 課題設定

範域を拡張する。

論壇や文壇によって構成されるシーンはふたつの相貌をあわせもった。すなわち、討議／芸術空間としての位相と、商業空間としての位相と。両空間の斥力と求力が批評のダイナミズムを発生させた。ジャーナリズムにおいて両相は分かちがたく結びついている。にもかかわらず、前者ばかりがクローズアップされてきた。学問的にも批評的にも。かりそめに後者が扱われたとしても出版産業論の文脈に局限された。そこでは反対に前者が切断される。いずれも片手落ちといわざるをえない。私たちは両相を包括的に語る枠組みもボキャブラリーももちあわせてはいない。

冒頭の問いに返ろう。あるひとは「存在した」と回答する。強靱な魅力を湛えた固有名を選出していうだろう。この思想家を見よ、と。小説家や批評家でもかまわない。また別のひとは複数の固有名を並べ立てるかもしれない。特定の系譜の描出を企図して。ときにその排列は群像劇に仕上がる。専門的には、思想史や文学史、批評史として叙述されよう。いずれにせよ、そこで測定されているのは言説やテキストの内的意義だ。折り畳まれた拡張可能性（⇨伸びしろ）が問われる。解読者は各自でそれを解凍する。あるいは、自身の文脈に応答してくれる断片や論理を任意に取り出す。たしかに、この種の手続きは無視しえぬ成果をもたらしてきた。テキストや固有名の延命にも貢献した。だが、言論発祥の現場を決定的に見誤っている。二面性の一方しか見ていないのだから。そのかぎり、言

論の総体的な把握にどこまでも失敗し続けるだろう。

思考は剥き出しでは流通しない。媒介を要する。雑誌なり新聞なり、あるいは書籍なりのインターフェイスを。その物質性こそが商品空間に屹立する。読者が手にするのは商品だ。でなければ、「社会的に存在することは不可能である」(大宅)／「存在することはできない」(大宅)。

事態はひとつの執筆態度を招来するだろう。すなわち、自らのテキストが商品たらんことをあらかじめ想定した執筆態度である。程度の差はあれ、あの移り気で散漫な読者を意識しないわけにはいかない。いや、この説明は不正確だ。書き手はあるいは意識しないかもしれない。だが、発表媒体は必ず別の誰かの手によって設計されている——大方は編集者のディレクションで。企画内容だけではない。冊子の形状やデザインから紙／誌面のレイアウトにいたるまで、読者傾向を綿密に計測したフォーマットが用意される。思考はその所与の鑄型に流し込まれる。媒体上の制約も少なからず受ける(紙幅の設定など)。結果的に、書き手は読者を意識したかたちとなる。

ひとはなにゆえそれを言論なり批評なりと見做すのか。その判断基準は外的な要素に深く根ざしている。フォーマットの様態が認識の相当部分を決する。どのような場所に印字されているのか。先行する何と類似した文体や表記法を採用しているのか。長さはどれくらいか。経路に依存する。そうした条件の数々をさしあたり「様式(スタイル)」という語彙で代表させておこう。

ある特定の様式を備えたものは言論と名指され、別のものは言論と呼ばれない。批評も同じだ。いうまでもなく、読者の期待の地平において、形式は内容に先行する。事前に形式から内容が推測される。経験的な学習を積んだ成果としてそれは可能となっている。したがって、適合するヴァリエーシ

ョンはごくかぎられる——それ以外の大半はそもそも読者の認知限界を超える。まずもって、それと認識されるには正統な様式性を揃えておく必要がある。言論は各種の外在的形式に強く規定されている。事前にであれ事後にであれ。じつのところ、内容など読まれてはいない。

にもかかわらず、ひとはこの条件を度外視する。あまりに自然化された制度として作動するがゆえに、それを見ない。見ることができない。そのため、フォーマット設計時に混入した人為性や偶有性が意識から消去されてしまう。あたかも無重力空間で制約なく発語されたかのごとく扱う——後世の批評行為や通史的記述が嵌る陥穽だ。それが商品であった履歴など忘れたがっているようですらある。言論は市場経済と無縁だといわんばかりに。あるいは、二次／三次的な転載の連鎖(単行本、選集、全集、文庫、ウェブ……)が初出環境を無自覚のうちに忘却させるのかもしれない。単行本や全集といったパッケージに格納されるや、テキストはがぜんソフィステイクートされた装いを帯びる。しかし、そもそもそれらはきわめて猥雑な空間に差し出されていたはずだ。

再度反復しよう。言論は商品として存在した。市場のダイナミズムの渦中に放り込まれる。私たちはこの存立条件を意識化する地点から出発しなせなければならぬ。ごく素朴に。経済資本に還元されざる価値の別出ばかりがテキストと対峙する誠実な態度ではない。むしろ逆だ。

この先のアプローチは幾通りにも分岐するだろう。たとえば、私たちはマーケットそのものに意識を傾注することができる。そこでは出版市場の統計データに依拠した精緻な経済分析が期待される。書き手たちの収支状況の変動をリサーチしてみてもよい。原稿料や印税、著作権など諸課題が山積する。あるいは、時代別の読書実態にフォーカスすることもできよう。読者の消費環境をいまに伝える

特殊資料の発掘と解説が単発的ながら進められてきた(日記やアンケート、回想記などの断片的記述の活用)。デモグラフィックな解析を可能ならしめる諸データもいくらか存在する。これらの成果に新知見を累加する手堅い作業は不可能ではない。多方面に寄与するはずだ。

しかし、これより本書がたどる行程はいずれにも該当しない。その類の情報への目配りはミニマルにとどまる。といって、個別テキストの解説に沈潜するわけでもない。もちろんだ。では、私たちはいったい何に着手しようとしているのか。

たとえば、先の「存在した」にこう再問しよう——ならば、どのように？ 私たちは、何が記述されているか(Ⅱ内容)ではなく、どう記述されているか(Ⅱ形式)に軸心を移動させる。どういった場所に掲載されているのか。問題化されるのはその点だ。内容分析から形式分析へ。これは言論や批評を発表形態の物質性において捉えかえすスケールの導入を意味する(言論の存在論)。言論を言論たらしめている、批評を批評たらしめている下層構造や諸装置に関心が注がれる。約言すれば、言論や批評のアーキテクチュラルな位相へとむかう。あるいは、場やシステムそれ自体へと。そう、課題はメディアの考察に傾斜する。

メディアは無色透明ではありえない。むしろ、メディアこそがメッセージである(M・マクルーハン)。コミュニケーションの意味産出に不可避的に介入してくる。中性的なコミュニケーションなどありえない。にもかかわらず、こと批評や言論となるとコンテンツばかりが饒舌に語られる。他方、メディアは秘して語られない——この偏りはあまりにロマン主義的だ。それはいかに設計されたのか。なぜそのようにデザインされているのか。どの要素も読者を強烈に意識した出力結果であるはずだ。そこ

にこそ商品としての相貌が立ち現われる。先引した中井正一「文壇の性格(前掲)はこういった。編集主体は「紙面の体裁を大衆の要求を目標として、予め設計して割当てる。或場合はその書かるとき内容すらも大体設計図の中に入れて置く」。本書の能力の過半はこの「設計図」Ⅱ「言論の条件」の解明に費やされる。

大熊信行は論説「工芸品としての書物」(一九三三・五)で文学(言論)の商品態をふたつに大別した。すなわち、「定期刊行物」と「単行本」と。初歩的な分類だ。そして、後者の「工芸的価値」を解析する。装幀や活字、紙質に「代価」の大部分は支払われているという(だから、コレクションの対象となりうる)。文字どおりマテリアルな要素だ。しかし、そこである「物的な存在形式」は内容と完全に独立し、端的に、ある——大熊自身も内容と形式は「無関係」だと断言する。そちらは、フェティッシュとしての「存在形式」に固執する凡百の書物論に任せておけばよい。

私たちは内容・形式が相互前提的な関係を切結ぶ界面へと目を転じる。たとえば、書き手のメッセージ(Ⅱ内容)に対して少なからず規範的な拘束力を発揮するエディトリアルデザイン(Ⅱ形式)の批評性がそれだ。ときに執筆行為をほとんど生理的に管轄してしまうほどの操作性。そう、私たちは編集という行程にアクセントをおく。こうした目的のもと、「よみすてられたあとで、書架をかざるといふことがない」と大熊が不問に付したもう一方、すなわち「定期刊行物」に専念しよう。具体的には、雑誌や新聞の各種記事様式に照準を設定する。なぜか。理由はいくつかある。

社会批評家の戸坂潤は論説「新聞の問題」(一九三三・二)でこう述べている。「編輯労働の形態は単行本に於てよりも雑誌に於て著しい。そしてそれが最も徹底した純粹な場合が「……」新聞の編輯的な

である」と。「編輯労働」とはなにか。その内実は前段で以下のとおり整理される。

「……」編輯労働の特色は、第一に、その生産品たる編輯物が、一つの作品又は論文といふやうな夫々の特性に基く内容価値の所有者ではなくて、これ等の特性ある内容価値を平均するやうな輪郭的な価値(夫は例へば目次に現はれる)と物的効果に基く外部価値(例へば装釘とか組み方)との所有者だといふことである。と云ふのは、この生産品に於ては、個々の文章の内部価値は、全く輪郭的なもの例へば題と人名とによつて置き代へられ、題と人名との結合がそして編輯物の特有な価値である報道価値を生産するのである。「……」編輯労働の第二の特色は、その労働価値がただ一回の労働の内に横「た」はるのではなくて、持続的な労働系列といふ形式的な過程の内に初めて横「た」はるといふ点にある。編輯労働の価値はその週期性に依存することを注意すべきだ。

「編輯」は思考や創作の「内容」に直截的には関与しない。かわりに、コンテンツとしての定型を与える。それにより認知可能な範囲内に「平均する」。すなわち、「輪郭的な価値」を有している(すでに私たちは「装釘」や「組み方」などの「外部価値」を考察から除外している)。ただし、その「価値」は「週期性」を前提とする。戸坂は編集をそう位置づけた。じつさい、ある編集作法は起源を避ければ必ず特定の(多くの場合は無名の)編集者による偶発的な着想へとたどり着く。それが連続的に酷使される。その反復性が偶発を必然に変換する。その結果、定着を見る。すかさず他媒体も模倣をはじめめる。この一連のプロセスのなかで公共性を帯びていく。定型Ⅱ様式が確立されるのはここに

おいてだ。と同時に、時間の経過は派生態や融合態を無数に生み出す。いずれも「週期性」に由来している。それら可視的な様式群は読者の認識枠組にジャンル概念を芽生えさせるだろう。物的な記事様式の理念化。さしあたって、それを「記事ジャンル」と呼ぶことにしよう。

単一の雑誌や新聞には多彩な記事様式が併載されている。浮薄な一般読者の興味を回収する工夫でもあった。じつさい、ギミックとしての記事様式が大量に発明された。背景には熾烈な販売競争がある。読者の消費欲求やニーズをいかに喚起/充足させるか。目先を変えることでいかにアテンションを獲得・維持するか。商業主義のロジックが作動する。これを反転的に捉えるならば、紙誌面から同時代読者の姿形が透かし見えてくるはずだ(ここで、R・シャルチエの読書論を援用してみても可わなない)。「大衆[読者]の要求を目標として」(中井)、インタラクティブに誌面設計されているのだから。

では、同時代読者とは誰のことか。前提となる時代状況を急いで概観しておこう。次章以降の議論をあたらうかぎりコンパクトに進めるために。整理の過程で読者の位置価も測定されていく。

3 出版大衆化 円本・革命・スペクタクル

社会批評家の室伏高信は、エッセイ「二分の一ジャアナリズムの横行」で次のように述べている。³¹
一九三二年二月の証言だ。

この頃では、大抵な伶俐な青年は、雑誌の小説を一々読む代りに、新聞の月評をのぞいただけで間に合せると聞いてゐる。論壇時評なるものゝ近頃流行し出したのもこの種の新しい読者心理に訴へるためであるかも知れない。

小説作品や高度な知識を要求する論文が毎月大量に生産される。個々の頁数もかさむ。すべて読み込み消化するのは容易ならざる行為だ。時間的にも金銭的にも、なにより能力的にも——この三点を大熊信行も配分資源の基本尺度としていた。しかしながら、「青年」たちは知的流行についていかなばならない(教養主義的圧力)。文芸時評や月評、論壇時評、社会時評をはじめ各種時評は、こうした一般読者の知的欲望に欠如に即応する緩衝装置としておおいに活用されたのである。膨大に存在するオリジナルのテキストを随時選別する。それらをダイジェストに仕立てる。そこにアジェンダを見出す。可能ならば、一定のヴィジョンを添加する。かかる代行的な中間作業の提供はあらゆる側面(時間、金銭、知力)で怠惰な読者たちに絶大な利便をもたらすだろう。

時評にかぎらない。この時期、近似した論理と発想に由来する記事ジャンルや出版スタイルが陸続と誕生している。読書行為の省力化は時代の趨勢だった。言論をとりまくコミュニケーション・チャネルの多様化が進行する。そのいくつかが「流行し」た。のみならず驚くべきことに、その大半は八〇年以上が経過した現在でも運用され続けている。いささかも形状を変えることなく。それゆえ、機能不全に陥ってもいる。本書の言外の関心はこの現状へとことあることに差し戻されることになる

だろう。

いかなる経緯においてそれらは産み落とされたのか。いまいちど当時のコンテキストを掘り下げておく必要がある。ことは本書全体の枠組にかかわる。キーワードは大衆化だ。極限まで圧縮しておく(昭和戦前期の出版状況に精通した読者は必要に応じてスキップしてかまわない)。

関東大震災直後に全集販売が流行した。一九二四年から数年間のことだ。多くは予約制を採る。それが助走期となり、一九二七年より次のフェーズに移行した。いわゆる「円本」ブームが出版界を席巻する。一冊一円の廉価版全集が激増した。改造社が社運挽回すべく仕掛けた『現代日本文学全集』(一九二六・二二―一九三一・一二)の刊行に端を発する。そのダンピング路線の成功は他社の類似企画を膨大に誘発した。数百種にのぼる。日本文学にかぎらない。世界文学、経済学、法学、科学、芸術などおよそあらゆる分野の全集が出揃う。全集という圧倒的物量を誇示するスタイルが、いつそう旧作のストックの放散を演出した。

必然的に、同系全集間での販売合戦が過熱する。その際、宣伝媒体として新聞や雑誌など他種メディアが最大限に活用された。それらは多元的に連結し一大キャンペーンを編制する(同時多発的な連日投稿など)。それだけではない。他のテクノロジ一群もプロモーションに総動員された。代表的事例は、作家や批評家が全国各地を巡廻する関連講演会の開催である。あるいは、それと頻繁にセット上映された映画コンテンツ。そして、音楽や演劇など。多感覚的なメディアイベントが組織された。スペクタクル化していく。一連の狂躁を顕在的画期として日本の読書環境は一変した。

その先に、出版大衆化(Ⅱ近代化)状況が到来する。

『現代日本文学全集』はみずから「文学の民衆化」を謳う(内容見本の文言)。同全集の開始直後、菊池寛「文藝時評」(一九二七・一)はそのセレクションに不満を示しつつも、「効績」をこう称賛した。³⁵「文学的読者を、異常に開拓した」と。そう、大衆読者が「開拓」されたのだ——それも「異常」なまでに。「文学的読者」だけではない。時を同じくして、ジャンル横断的に新たな読者層が発見されはじめていた。従来、民衆/大衆は知的読者たりえなかった。それどころか、あらかたノン・リテライト層だった。その彼ら彼女らが読書空間へと大量に呑み込まれていく。ここに、マスとしての読者が誕生した。階級横断的に読者階級が形成される。大正末期から昭和初頭にかけて加速した高等教育の大衆化とも連絡関係を結ぶ(学生Ⅱ潜在読者の急増)。学生読者に下支えされた知的中間層のボリュームがその後数十年にわたって、日本の言論ジャーナリズムを維持し続けることになるだろう。かくして出版市場が膨張する。量的拡大はそのつねとして質的変容をとまなう。

折しも、東京では一九三二年に市域拡大が敢行される(一五区→三五区/面積は約七倍に)。室伏のエッセイが発表された年だ。同様の再編は相前後して全国的に進行した。新聞社や雑誌社、出版社など情報発信を司る諸機関は商機を掴むべく、新市民層Ⅱ中間層の増幅への対応を迫られる。商圏拡大を見据えた編集方針の調整は不可避だ。

新たな読者にも享受可能な文学。あるいは言論や批評。その提供はいかにして実現したのか。まず低価格化は必定だった。³⁶ 円本ブーム以降、廉価販売がデフォルトと化す。印刷・製本などの技術革新による大量生産、大量販売がそれを可能にした——「大量生産薄利多売主義の時代が来た」(無署名)。「文藝春秋」(一九二七・三)。技術革新が新たな市場を生成させる。そのとき、既得権益は大幅に解体される(「文壇ギルド」から「チャーナリズム文壇」へ)。あらゆるイノベーションにとまら必然だ。出版をとりまくビジネスモデルそのものが刷新される。大宅壮一「出版革命の勝利者」(一九二八・一)は円本の登場に「出版界に於ける産業革命」を見た。³⁷ 刊行点数が爆発的に増加する。内容面では平易化が進む。総ルビに象徴されよう。大衆小説や随筆の流行もおおむねこれに相即する。³⁸ あらゆる読解補助の装置が追加された。低廉と平易を兼備したパッケージが続々と発明される。文庫や全書、新書など出版インフラの整備はこの延長線上にある(いわゆる「講座もの」は円本に数年先行した)。³⁹ いずれも近い時期に連続的に考案された。むろん、知的中間層の需要に即応すべく。そして、拡販に奉仕するいくつもの方策がそこに実装されていく。出版が大衆化する。

『現代日本文学全集』で成功を収めた改造社は攻勢に出る。一九二七年二月、雑誌『改造』の定価引下げを断行した(八〇銭→五〇銭)。同時に組版を改変し、一頁に積載する文字数を増やす。あわせて総ルビも適用。「誌面の一大革命」を掲げた——そう、ここでも「革命」だ。こうして、新規開拓した読者を全集から雑誌へと誘導する水路も着々と設営される。これを受けて、他誌『経済往来』の「編輯後記」(一九二七・四)は、「雑誌が営業本位である」のは当然だという。いまや、「販路の拡張が生存条件」なのだから。「読者の趣向に投じる商品を、ウント安く提供する外ない」。

対抗誌『中央公論』も応対を迫られる。平均総頁数も漸次増加していく(五〇〇頁を超過する号も)。そこでも熾烈な広告合戦が展開された。パブリシティ戦略も巧妙化する。かくして、低コストで膨大なテキストにアクセスすることが可能になった。そうした読書環境が出現する。ことほどさように、

「出版革命」の効果はむしろ雑誌界において顕著に現われた。媒体種の多様化が進む。総合雑誌や文芸誌、一般大衆誌、婦人雑誌、各種ジャンル誌など、軒並み刊行点数が激増している。先行する委託販売制（一九〇九年開始）や定価販売制（一九一九年開始）の導入がそれを支えた。出版取次による流通ルートの全国的整備も作用する（流通圏拡大は円本ブームがもたらした副産物のひとつだ）。なかんずく総合雑誌の躍進が著しい。⁴³

一般読者の獲得と冊子の大容量化が進む。それにともない、誌面拡充が多面的に試行される。各種時評や月評、書評、座談会といったバラエティに富む記事フォーマット群の多くがこの時期に定着している——見方しただけでは、いずれも日本独自の文化アイテムだ（たとえば、海外の対応物の比定や翻訳作業の困難を想像せよ）。ごく短期間に集中的に発生した。

雑誌間で連鎖的な相互模倣が組織される。あるいは、折り重なるアレンジメントと踏襲と転位が。その過程でスタイルが洗練されていく。最終的にコモディティ化する。急速に成熟期へと突入した。現在まで続く言論環境が完備されるにいたる。一方では、一般読者たちの知的欲望⁴⁴欠如に即応すべく緩衝装置として用意された。情報量の急増に対応する処理能力をもたない読者層の便宜がはかられる。商品たるものが強烈に意識された。他方でそれらは、書き手たちの意識を形式面から深く規定する。論壇ジャーナリズムの成立と成熟はこうした時代条件に支えられていた。私たちが注目するのはこの基盤形成期にほかならない。

かくして、「新しい読者心理」（室伏）に呼応した誌面が要請／整備されていく。しかし問題はそれにとどまらない。室伏の論説と同じ年の一二月、哲学者の三木清は論説「批評の生理と病理」にこう記した。⁴⁵ 室伏の議論を半歩進める。

今日或る人々はもとの論文やもとの作品を読まないで新聞や雑誌の論壇時評や文藝時評或は「戦艦」などを読むだけでその論文やその作品についての定まつた意見を作つてあるといふことがなくはなからう。これは固より歓迎すべきことでない。然しながら批評家・プロフェツサーと雖も時には同様な遣方をしないと云ふことは不可能である。

専門的読者（「批評家・プロフェツサー」）までもが時評類を手軽なマニュアルとして活用する。それによって、次のような回路が開かれる。ある評者の私的な「意見」や批判が時評という半ば公的な意匠をまとう（第一章で述べるように、しかしそれは偽装された「公」性だ）。そして、多くの専門家に配送される。専門家たちは時評で得た知識や認識との距離感覚を素地にみずからの「意見」を再組織するだろう。それが各自の仕事に反映される。そのプロセスにおいて、私的な「意見」はしだいに公共性を獲得していく。効率優先の読書環境の整備が「精神のオートマティズム」をもたらず⁴⁶。三木の懸念はそこにむけられていた。つまり、時評（的な）言説の流行は思想の定型化を招来するのではないか。それは批評精神の空無化にほかならない。そうした三木の危機感は正当なものだ。とはいえ、三木自身もこのシステムの外部に立っているという保証はどこにもない。

読者のみならず書き手に対しても規範的な拘束力をもつ、と前述したのはこの意味においてである。そのことは少なからず同時代的に察知されてもいた。では、どのように。

本書を導く基本ツールを確認しよう。そのなかであきらかになるはずだ。

4 ジャーナリズム論の時代 総合雑誌史

一九三〇年前後、あるタイプの議論がジャーナリズムに急増する。他ならぬジャーナリズムを批評対象とした言説たちだ。『総合チャーナリズム講座』全一二巻（一九三〇―三一年）の刊行に代表される。コミュニケーションの様相についてのコミュニケーションの増殖。自己言及の流行は当該領域の成熟を示す指標となる。日本のジャーナリズムは次なるステージへの模索段階にあった。具体例で考えよう。『経済往来』一九三〇年一月号に掲載された特集「現代チャーナリズム批判」を見る。

この特集は活字メディアの現状を俯瞰した論説群からなる。千葉亀雄「現代ジャーナリズム論」をイントロダクションとして、青野季吉「現代新聞論」、山川菊栄「現代婦人雑誌論」、早坂二郎「現代娯楽雑誌論」など各論が続く。『経済往来』は一九二六年に経済情報誌として創刊した。ところがこの時期になると、論壇総合メディアへのモデルチェンジを画策しはじめる。並行して、同種企画が頻繁に組まれるようになる。ジャーナリズム論はスプリングボードとして要請されたのだ。特集内の新居格「現代高級雑誌論」の存在それだけに構図が再帰的に集約される。文中、「高級雑誌」は『改造』『中央公論』の二誌を指す。用語定義はない。かわりに二誌共通の特徴があげられる。こう整理する。「社会、政治、経済の評論雑誌であると共に、その一部をさいた文藝部面でも注目を以つて迎へられてゐる」。最小限だ。が、的確な解説になっている。じつさい、当時そのような意味で一般的に使用された。では、内容面はどうか。

新居は続ける。従来、『改造』には「急進」、『中央公論』には「穩健」というレッテルが貼られる傾向にあった（そしてそのレッテルは間違っていない）。だが、いまやその「評語」は機能しない。のみならず、イデオロジカルには逆転現象すら観察された——無署名「雑誌界の二代表」（一九三一年）は、同月の両誌を比較しこの点に言及する。二誌ともに特定の「主義」を護持しているわけではないからだ。なにより、「少なからざる執筆者が重複」している。一誌限定の常連寄稿者はむしろまれである。したがって、内容で両者を識別することは難しい。ならば、読者は何を頼りに選択すればよいのか。新居の回答は明晰だ。「執筆者の組合せ、問題の視ひ所、何をどう捉まへた」か、といった諸点に特徴は表出する。あるいは、「どうして得がたき原稿をとつて来たか」、に。それは「月々に決定される」。ゆえに、評価は固定しない。基準はそのつどの編集技法に見出せ。そう指南する。

たしかに、少なからぬ読者が編集の巧拙や成否を判断材料に雑誌の購入を決定している。新居にいわれるまでもなく。ただし、多くは無自覚に。

読者はその月々の編輯を見て（もしその一冊だけを買ふとすれば）そのどちらかを買ひ求めるやうになるのではないかと思はれる「……」。例へば、今月の創作は「改造」の方が面白さうだが、論文は「中央公論」の方がよく集められてみるとか、中間物はどつちがどうだとか云つたやうなことによつてその去就が、その月々できめる浮動読者層があるやうになつて来たのではないかと思

はれる。⁵⁴

そう、全員が定期購読者とはかぎらない。むしろそれは少数派だろう。「浮動読者層」が広汎に存在した。文字どおり移り気な読者だ。歴史的データを参照する者が見落としがちなのはこの種の条件である。定量的なデータ(発行/販売部数)は購入決定にいたる全プロセスを消去してしまう。読者は店頭で複数誌を比較する。もしくは紙上広告で。そのうえで購入している。比較考量の尺度として優位にくるのは「月々の編輯」だ。ただし、比較には同種性が先行する。同一カテゴリへの帰属が前提となる。この場合、それが「高級雑誌」と通称された。必然的に競合する。

『中央公論』は一八九九年一月(前身「反省会雑誌」は一八八七年八月)に、『改造』は一九一九年四月に各々創刊した。一九二〇年代前半、両誌は拮抗しあいながら対象領域を漸次拡大していく。アカデミズムと共依存関係を結びつつ、とりわけ社会科学方面でのプレゼンスを増大させた。時代を画す諸論争の舞台を幾度も提供した。時局や政局を論評する新規媒体として定着していく。ステータスを上昇させた。⁵⁵ 商業的にも社会的にも。その結果、論壇の構成拠点と化す。一九二〇年代後半には、出版大衆化を背景として飛躍的に部数を伸ばした(両誌が商業路線を強化するのはこの時期だ)。読者層が大規模に開拓される。大衆化時代にあつて、にもかかわらず「高級」であり続ける。⁵⁶ そのことが逆説的に商品価値をもった(新居は「通俗高級雑誌」というねじれた表現も与えている)。むろん、内実は平易化が進む。だが、相対的に難解ではある。その難解さゆえに欲望の対象にもした——大熊信行のいう「よみがたいが買ひたい本」に相当しよう(愛書家と読書家 一九三三・一〇)。

読者拡大と並行して執筆陣も充実していく。マルクス主義全盛の最中、左派論客たちが大学から放逐された。彼らは新たな活動の場を商業誌に見出す。たちまち環境適応を見せた(第1章で詳述)。層状となって「高級」を演出する。知的言説の商品化が急速に進行した。販売競争のプロセスで誌面スタイルも随時調整される。ジャーナリストイックに洗練されていく。

むろん、論壇にとどまらない。一九三三年の雑誌状況を回顧した匿名記事はこう整理した(『出版年鑑昭和九年版』)。「これ等の雑誌『I』『総合雑誌』を通じて、極度のチャーナリストテックな傾向が支配し、いはゆる藝術的なもの思想的なものは次第にはみ出された形勢になって来た」。次の文言が後続する。「しめだしを食はされた藝術的作品を拾ひ集めて守りたてやうといふ傾向が別に起つて来た」。のちの章で見る『文学界』や『行動』などが具体的な事例だろう(第3章)。あるいは、『文藝通信』や『文藝』が。創刊が接続する。いずれも一九三三年秋の出来事だ。それが「文藝復興」の機運を醸成した。というよりも、円本ブームを着火点とする「文藝復興」の情勢に後押しされ創刊ラッシュが現出した。既存の老舗文芸誌『新潮』の独占状況を切り崩しはじめ。総合雑誌と文芸誌の動向が連動していた。双方を立体的に縫合する必要がある。総合的な考察を可能にする枠組の設計が本書のミッションのひとつだ。

さて、「現代高級雑誌論」のちようど五年後。新居格は「総合雑誌論」という類似論説を発表している。『日本評論』一九三五年一月号に掲載された。『経済往来』の改題後雑誌だ(一九三五年一月に改題)。タイトルからうかがえるとおり、「高級雑誌」が「総合雑誌」と呼び替えられた。文脈は大差ない。ただし、該当誌に変化が見える。『改造』『中央公論』に『文藝春秋』『日本評論』が追加

された(論考の冒頭見開き頁には四誌書影を挿掲)。掲載誌そのものを勘定に入れてはいる。

一九三〇年／一九三五年のふたつのテキスト。そこには微細な差異がある。それはこの五年間の雑誌界の変遷を雄弁に物語っている。先行誌の成功をうけて追隨例が続発した。個別領域に特化していた雑誌までもが超ジャンル型の「総合」を志向する。転態が進む。類似雑誌も続々創刊された。そのことごとくが『改造』や『中央公論』を参照・模倣する。ほどなく、一群の雑誌には「総合雑誌」なる総称があてがわれた。用語として浸透する。

この語は一九三〇年から三五年までのどの時点で出現したのか。解像度を上げよう。いささかの煩瑣を承知のうえで、確定させておきたい。本書の主要な分析対象のひとつでもあるからだ。

『出版年鑑』は各年の上半期現在(主に前年)の出版動向を克明に観察・記録した年刊の資料だ。「雑誌総目録」欄が一連の変動をきれいにトレースしている。一九三〇年の「昭和五年版」において、各誌はそれぞれ以下の領域を扱う媒体に分類された。『中央公論』『改造』は「政治・社会」。『経済往来』は「財政・経済・商業」。『文藝春秋』は「文藝」。これが一九三四年の「昭和九年版」をもって再編される。四誌すべて「政治・社会・評論(総合雑誌)」を扱う、と——経時変化の詳細は註に譲る。ここに、「四大総合雑誌」という括りが完成した(したがって、「総合雑誌」は戦時期の雑誌統廃合に際し、当局により部門分けの呼称として新設された語だという、従来採用されてきた解説は厳密には正しくない)。一九三三年頃から、「高級雑誌」という汎称に加えて「総合雑誌」も広く併用されはじめたと推定される。むろん、初出はさらに遡行可能だろう。

新居論説の発表はこれ以降のことだ。テキストに戻ろう。論旨は前稿と変わらない。「執筆者が大

体似たり寄つたりだとすれば、所謂高級総合雑誌の差異は雑誌社の編輯方針と編輯プランによつて生ずる」ほかない。そう復誦した。歌舞伎になぞらえてもいる。「役者の如何よりも出し物が問題」と。「役者」は有名性を帯びた書き手である。ならば、「出し物」はさしずめその演出法に相当しよう。具体的にはテーマ設定などに。著名な書き手の利用はもはや前提条件だ——「一般に通つた名前が要求せられる」(中井正一「文壇の性格」前掲)。その点では他誌との「差異」が発生しない。鍵は演出「編輯」にある。それを競う。

たとえば、座談会記事。その商品価値はもっぱらキャスティングに依存している。固有名の「組合せ」——前稿で新居が使った言葉だ——しだいでいかようにも増減する。論争中の論客同士のマッチメイクは記事の話題性を一躍高めるだろう(第3章で詳述)。帰属集団や活動フィールドを異にする論客たちの異種交配も自在だ。先在しない文脈の創造が可能となる。編集とは有限の固有名の組合せである。そう極言してみてもあながち間違いではない。コミュニケーションをデザインしている。他にも、この時期に新たな誌面企画や記事様式が数多く誕生した。手を替え品を替え、斬新なアレンジ法が模索された。しかも、競合誌は増加の一途をたどる。その結果、模倣と差別化のリズムが加速する。熾烈な編集合戦が展開された。誌面は急速に成熟していく。

新居は提案する。「この雑誌のこのテーマよりあの雑誌のあのテーマがいゝと云つた風に月々の出来不出来を批評する」態度を導入せよ、と。同様に、杉山平助「文藝時評」(一九三二・三)は、「新聞雑誌の編輯批評といふものをもつと盛んに起さなければならぬ」と再三強調した。そう、要求されるのは「編輯批評」というアングルだ。それは、読者が購入に先立って半ば無意識裡に行なう比較検

討よりもい、か専門的であり、そうした読者の嗜好を導く要因にこそ分析の焦点を絞った批評となる。じっさい、新居や杉山はそれに相当する批評テキストを量産した。「編輯者の立場と共にその心理をも十分に理解してゐる」(大宅壮一「文壇的人気分析」一九三五・四)。だからこそ、編集者から重宝されたのである。

ふたりにかぎらない。ジャーナリスティックな読みを披露する書き手が広く活躍した。極度のジャーナリズム性。先に見た大宅壮一や大熊信行、あるいは青野季吉や戸坂潤などがそうだ。あわせて、「出版資本及びそれを圍繞する番頭手代たる編輯者、或はその編輯技術といったやうなもの」に専心する批評欄も随所に設置された(杉山平助「匿名の流行」一九三三・五)。「編輯技術」の主題化は時代が要請する批評態度だった。当時の言論空間が自己修正的なオペレーションを備えていた証左でもある。自存能力を備える。しかしながら、ほとんどは忘却の淵に追いやられてしまった。奪人称化する。単行本化の機会も少ない。勝本清一郎「現代文藝批評家論」(一九三五・六)は、杉山平助の「仕事」をこう評す。「単行本で読まれては彼の評論も台なし」と。コンテキストを繰込むことによってはじめて意味をなす文章構造になっているからだ。

文藝批評家にもいろ／＼なタイプがあるのであって、紙の上の批評文そのものの中にその仕事の生命がこめられてゐるやうな仕事振りもあるが、杉山氏の場合の如くに、現実の社会の中に波紋を起す作用の中にこそ自分の仕事の生命を見出してゐて、その波紋が静まれば彼の仕事の生命も終り、もし彼の仕事が残るとすればそれは書き残された評論集の中にはなく、文壇が実際に動

いた歴史の滯の跡にこそ何らかのかくれた形でうかゞへる、と云つた風な仕事ぶりもある。／「死んでから名を残さうとか藝術を残さうとかいふ気もちはトコトンのところまで突きつめると、私にはない」と彼ははつきり云ひ切つてゐる。

自負にたがわず、杉山の仕事は残らない。大宅にしても大熊にしても、他の仕事はともかく、編集批評のテキストは残らない。まずもってかえりみられない。徹底した適時性ゆえに。しかし、後世の視点で検分するならば、そこには萌芽的なメディア論をはじめいくつもの未完の着想が折り畳まれていたとわかる。私たちはこれからその種のメタテキストを膨大に発掘していく。点状に分散した非人称的で匿名的な言説の断片。それらを線状に走査する。そして、そのつど論述のガイドとしてリサイクルする。即時利用が可能な形態にパッケージ化する。これ以上の同型の議論の反復を回避し、ステージを先に進めるために。

したがって、私たちはどこか特殊な読解態度を要求されることにもなるだろう。つまり、場合によつては、分析対象そのものを導きの糸としつつ分析枠組を再構築していくという入れ子型の論述を露呈する局面が訪れるかもしれない。再帰的な言説群から抽出されたエッセンスを再帰的に適用する。これはともすれば事後的な定義や評定が必要以上に介入してしまう倒錯的な視座を抑制する必要を鑑みてのことだ(そもそも「メディア」なる括りじたいが後代の概念でしかない)。同時代の言語なり感触なりによって言論生成の現場を浮かびあがらせる。優先されるのはその作業だ。それゆえ、執拗に引用に語らせるスタイルを採る。批評論と称して現在の私たちが展開しそうなことの大半はすでに誰

かによって語られてしまっている。何度もそれを痛感するだろう。

5 時限性と非属領性 本書の構成

川端康成「信念と若い無謀さで」(一九三三・一一)は、同時代の編集者たちにこう助言している。「編輯者に期待するのは、無私の公平よりも無私の独断である。文壇だとか読者とかいふものの幽霊の正体を見抜くことが必要である」と。

だが、この要望への応答は困難をきわめたはずだ。時代的な限界もあった。批評家たちも「正体」を掴みかけては取り逃がしている。「文壇」や「読者」だけではない。「論壇」や「批評」「言論」も同様だ。おそらく、これらは足場を欠いた人工的概念にすぎない。しかし、制度の虚構性や無根拠性を暴き立てるだけの断言にどれほどの価値もない。本書のミッシェンのいくらかは「幽霊の正体を見抜くこと」にある。それらはエコシステムを形成していた。単体での完結性などありえない(先行モデルとしての文壇なくして論壇は存立しえなかつた事実を想起すれば足りる)。マガリージョンを形成していた。異なるスケールを自在に往還しつつ複数の擬制的空間を連動させる、そのような想像力の回復が「幽霊」の捕獲には不可欠だ。ことさらに、「雑・誌」というインターフェイスが強調されるのもそれゆえである。多領域の混淆した批評言語が交換される場Ⅱ空間の力学やメカニズム、あるいはそれが立ちあがる一連のプロセス、その理論/実証的な解析に全体の課題は設定される。

日本ではごく短期間に言論の場が完成した。一九二〇年代後半から三〇年代中盤にかけてのことだ。現在もこの時点で構築されたパラダイムの只中に批評はあり続けている。本書の解像力と関心の大半は当該期間につき込まれる。直接取扱う対象は時代的に限定される。くどいほどに。にもかかわらず、獲得される成果の効力の射程は特定の歴史段階に局限されるものではない。任意の歴史的局面に適用可能である。成熟のタイミングこそが正しく測定されなければならない。したがって、ここで通史的な全容解明は目指されていない。厳密な起源も問題ではない(無際限なまでに恣意的な適行が実現してしまうのだから)。通史としてスケッチするにはまったく別の目的と筆致とスペースとが必要になる。本書はそうした一切に興味をもたない。いわば、ここで描かれるのは批評の進化史というよりも生態図に近い。

各種の記事様式や出版形態が连接的に誕生する。きわめて限定された時/空間に大半のアイテムと要素とが出揃った——そして、現在にいたるまで延命する(ただし制度疲労を起こしている)。定着のプロセスも極度に圧縮された。先述のとおり、それらは偶発的な条件のもとに産み落とされる——ジャーナリスティックなセンスの所有者たちに目ざとく論評されるだろう(そうした初期反応を拾い集める作業も本書の課題のひとつだ)。偶発ながら、連鎖的な転位と模倣の果てに公共性を獲得するにいたった。自然化する。急速に。定型も確立する。そして、インフラとして機能した。以降、ほとんど意識されない。それらを本書では「批評メディア」と総称することにしよう。私たちはそのデザインワークの軌跡を追跡していく。

議論の進行とともに歴史的考察が言外にたえず現代的な課題として折り返されていることに気づく

だろう。主張やイデオロギーをいちど括弧に繰り入れ、言論の地盤形成とその変遷を唯物論的に捉えかえす。迂遠で凡庸なアプローチだろうか。だが、ここからしか批評の再設計も再起動もありえない。本書の分析対象を包括する語を選定しよう。

さしあたって私たちは、「言論の環境」にそれを代表させておく。先の「言論の条件」に加えて、ゆえなきことではない。たとえば、文芸批評家の矢崎弾はことあることに「環境」を問題化した。「わが批判者に与ふ」(一九三四・七)でこういつている。「新文学から豊作を期待する念願に飢ゑればこそまづその環境をもの語り、旧人批評家の予備知識たらしめようとした」。一九三三年前後、矢崎は小林秀雄に後続する新進気鋭の批評家として颯爽と登壇した。その際、「新文学」の後援を宣言している。文学の現「環境」条件を数えあげる。それを「旧人」たちに周知徹底させる。そうした作業から出発したのだった——一冊目の著書のタイトルはまさに『新文学の環境』(一九三四・一一)だ。もちろんこれは一例にすぎない。谷川徹三なら「周囲」というタームにそれを集約させてしまおう(『文学の周囲』一九三六・一一)、大熊信行なら「メカニク」と表現してみるだろう(『文学のための経済学』一九三三・一一)。

これから私たちが従事する作業も、「環境」条件をひとつずつ炙出し、数えあげていく試みにほかならない。それは、たとえば音楽の領域でいうノーテーション(記譜法)に、舞台演出でいうセノグラフィ(構成技法)に相当しよう。言論を縁取る舞台装置を並べていく。問題とするのは、批評のサーキュレーション(回路/普及)だ。それをプロトコルに整理する。最終的に総体として提示されるのは、批評の再生にむけた「予備知識」だ。目的地はもうあきらかだろう。

——とでも書き起こせば、本書の冒頭も多少は座りがよいのかもしれない。ところが、これから各章で取扱われる対象は、じつのところ、いずれも序章を冠するなどおおよそ相応しからぬ性格のものばかりだ。そっけなく裸で投げ出されるべきものだといいてよい。

じつさい、従来いかなる領域においても関心が払われてこなかった。まったくいいてよい。研究や批評の対象とならない。非属領的な周辺物。風景としてつねに放置され続けてきた。まづもってその通俗性と時事性ゆえに。「よみすて」(大熊)があらかじめプログラムされている。「雑文」に属す。ましてや、その雑文を評したテキストはいらぬ。時間性に耐えない。どれもあらかじめ時限化されたメディアだった。そればかりか、当の書き手のキャリアにおいてもしばしば等閑視される。誰のものでもない、単行本や全集における座談会記事の扱いを想起せよ。決してマスターワークと見做されてはいないはずだ。研究的視点からはサイドリーダー的なポジションを与えられるのが関の山だろう。だが、それらはほんとうに放置し去るべき対象なのか。

事態はテキスト内容(真/偽)を重視する構えに由来している。それでは粗雑な記事様式の存在意義の大半は捉え損ねられてしまう。内容以外(以前)の側面に照準を再設定する必要がある。たとえば、テキストをとりまくコミュニケーション形式(提供/消費)に。したがって、ここではプロダクトとしてのクオリティは問題にならない。この理解のうえで、私たちは各欄の成立プロセスと諸機能、存立機制を検討していく。歴史的に理論的に。批評的に。時限性を抱えた取るに足らぬ、テキストたちをその時限性ゆえに召還する。コンテキストが拡散してしまつた後代において積極的な参照に値する対象たりうるはずだ。それらこそが秩序の準拠点として知的公共圏空間を維持していたのだし、時間性

に耐え残り続けるテキスト群の正統性を周辺部から備給していた。とすれば、正統なテキストの内容の解説はその作業の先になければならない。

*

さて、本書の核部は五つの章で編成される。そこに、記事様式／ジャンルがひとつずつ割り振られていく——論壇時評(第1章)、文芸時評(第2章)、座談会(第3章)、人物批評(第4章)、匿名批評(第5章)。これらは一例にすぎない。だが、私たちの考察にとつて優れたサンプルではある。なぜこの五つが選出されたのか。そこには必然性がある。行論の過程であきらかになつていくはずだ。そして、なぜこの排列なのか。私たちは、五つの様式を一巡するなかで冒頭の問いへの回答提出を目指す。ただし、それはどこまでも漸近的な回答でしかありえないだろう。

章間に相互リンクを網状に貼りめぐらせる。そして、各章末尾は次章への申し送りで開かれる。したがって、排列順に読み進めたならば、いくつものシーケンスが透かし見えてくるはずだ。章を跨いだ連絡関係を結節線として複数のサブテーマが並走する——場合によっては、既存の思想史や文学史の上書きを試みもするだろう。とはいえ同時に、章単位での単独完結が可能な構成にもなっている。必要や関心に応じて、どの章から読みはじめても障害がないよう配慮を施す。事前の予備知識も要さない。必要範囲で情報を圧縮し立論に組込む。考察の過程でキーワードが順次浮かびあがるはずだ。だが、ここで詳細な予示は避ける。事前に見取図を与える作業はこの序章の任務ではない。

下準備が長くなった。本論に移ろう。

第1章 論壇時評論

- 1 論壇とはなにか 第一の課題設定
- 2 レジユメ的知性 総合雑誌の論壇時評
- 3 空間画定と再帰性 学芸欄の論壇時評
- 4 メディア論の予感 相互批評の交叉点
- 5 消滅と転生 自己準拠的なシステム

1 論壇とはなにか 第一の課題設定

一九三六年九月、戸坂潤は『読売新聞』の「論壇時評」欄を担当した。それは、『論壇時評』とはなにか」という問いからはじまっている。自己言及的な問いの構造だ。しばらく時評は「論壇」論として展開していく。「論壇」の基盤を構成する「評論」や「雑誌」といった諸要素に行論の大半は費やされる。

戸坂は論壇時評におけるある「困難」を説いた（批評発表の困難相）一九三六・九。その困難は「文藝時評」と比較してみることであきらかになるといえる。戸坂の認識を斟酌するならば以下のようになるだろう。文芸時評は「文壇」の存在を自明の前提とする。文壇は「文学」という個別のジャンル領域にその属性を特定することが可能だ。要するに、文壇的事象とは、文芸誌や総合雑誌に掲載された文学、作品や文学評論、あるいは文学関係の書籍、さらには文学者のゴシップなどを指している。このことは常識的な了解に支えられる。他方、論壇時評はどうか。こちらは「論壇」の存在を前提とする。ところが、論壇は確固たる共有イメージを獲得してはいない。なぜなら、特定の個別領域に帰属させることが不可能だからである。論壇的事象は、政治、経済、法、文化、思想など多領域におよぶ社会現象を対象とした言説の選択的な集積により成り立っている。その選択基準は個々の判断にゆだねられる部分が大い。一意的ではない。

戸坂は明言する。論壇は「ハッキリとした輪郭を持ちながら存立してゐるのでもない」と。以上から、論壇時評の「困難」の内実が透かし見えてくるはずだ。すなわち、それは論壇を定義する作業の「困難」に由来している。論壇の「輪郭」は不明瞭である。だから論壇時評は難しい——。いたってシンプルな論理だ。

だが、この立論は完全なる転倒を孕んでいる。というのも、そもそも論壇時評には論壇の「輪郭」を規定する機能が期待されているからだ。その期待を受けてはじめて成立するメディアである。つまり、論壇時評とは論壇の存在を前提として時評を展開する場ではない。そうではなく、時評を遂行する、その営為によって論壇を言説的に「存立」させていく場なのだ（右記のとおり、「存立」という語は戸坂自身による）。論壇時評の対象は論壇時評そのものによって生成されるだろう。そう、再帰的に。したがって、何が論壇的事象かは事後的にしか決定しえない。まずもって留意すべきはこの転倒した関係である。

あるいは、論壇はその不在において語られる。「論壇は論壇時評のなかにしか存在していない」といった俗論がまれに囁かれもしてきた。断片的に、多くは同時代の論壇に充てた揶揄として。くしくもこうした直観は転倒関係の一面を言い当てている。しかし、印象論の範域を超えない。そもそも論壇の来歴について精密な検討が施された形跡は過去にほとんどない（いわんや論壇時評）。どこまでも分析を欠いたまま、たとえば「論壇の衰退」現象が発見される。しかし、論壇衰退が嘆かれなかった時代などかつて存在しただろうか。

《論壇》とはなにか》を熟思するところからはじめなければならない。私たちは、戦前期の論壇時

評の諸機能とその史的履歴とを整理・検証していく。その作業の過程で、戸坂の突きあたった「困難」に迫ることになるだろう。論壇は人工的概念にすぎない。序章でも述べたとおり、それは容易に想像がつく。しかし、制度の虚構性や無根拠性を暴き立てるだけの断言はおよそ価値をもたない。論壇はいかにして構成されてきたのか。

当面の課題は場Ⅱ空間の「存立」要件の解析に設定される。

2 レジユメ的知性 総合雑誌の論壇時評

論壇的事象は多領域より選択された言説の集合である。その選択指標として発表媒体をあげることができる。端的に、《どこに掲載されているのか》(Ⅱ形式)が境界面定の基準として優位的に作用する。《何を記述しているのか》(Ⅱ内容)ではない。そのもっとも有力な媒体がいわゆる「総合雑誌」だ。「論壇誌」なる通称はまだ存在していない。

なかでも『中央公論』と『改造』は二大誌として位置づけられてきた。同時代的にも歴史的にも。両誌は拮抗しあいながら社会的な認知を獲得していく。序章で触れた。一九二〇年代後半には出版大衆化状況が到来。一般読者層が開拓される。その過程で、急速に知的言説の商品化が進んだ。各誌とも商業的成功を収める。この流れをうけて、個別ジャンルに特化していた雑誌も総合雑誌へと転態しはじめた。『文藝春秋』や『経済往来』がそうだ(ここに「四大総合雑誌」が揃う。当時の表現だ)。

媒体数／総頁数／執筆者数／読者数、そのすべてにおいて総合雑誌は一定の拡充を達成した。論壇ジャーナリズムの成立と成熟はマテリアルにはこうした時代背景に下支えされている。

環境が整備される。それにともない、言論の多様化と複雑化が進行する。ここでは細部にわたる議論が実現するだろう。ところが同時に、その変化は全体性への接近を二重の意味で困難にしてしまう。第一に、言論の量的拡大により、個別の議論の文脈が不透過になる。そのため、読者は受け取ったテキストが全体においていかなる効果をもつのかを測定しがたい。第二に、多様な知的水準の読者層の取り込みにより、読解能力に極度の偏差が発生する。それゆえ、書き手はテキストの宛先を想定しがたい。かくして、言論空間の全体性を統御しうる視座の確保が困難になる。

この事態を緩和すべく導入されたのが論壇時評であった。飛び交う膨大な議論を交通整理する。そして、論壇という無形の場を可視化させる。そのような機能が期待された。まず、『中央公論』誌上で「論壇時評」という表題の連載企画が開始される。一九三一年三月号のことだ。この連載を見ていく。

『中央公論』の成功は吉野作造の存在によるところが大きい。吉野は代表的寄稿者だった。一九一五年一〇月号より、時評欄を長期担当している。欄題は「内外時事評論」「内外時論」「時論」「時評」の順に変化した(開始数年は「吉野作造」以外に「古川学人」など複数の筆名を使用)。一九二七年四月号以降は「社会時評」を採択。ただし、それ以前から「社会」領域の時代診断をリアルタイムで揭示し続けていた。任務は一貫している。ところが吉野は、一九二八年一二月号をもって同欄を突如降

板する。一三年間継続した計算になる。この降板の意味は吉野作造の個人史に回収してすませるべきではない。より広汎なスケールで捉える必要がある。当時、言論空間の決定的な地殻変動が進行していた。その事態の一端を象徴している。どういふことか。

それを理解するためには、もうひとつ象徴的な出来事と連接させてみるとよい。同じ「一九二八年」に発現した出来事だ。この年、いわゆる大学左傾分子の追放が大々的に執行された。河上肇(京都帝大)、大森義太郎(東京帝大)、石濱知行(九州帝大)、佐々弘雄(同)、向坂逸郎(同)らが大学から流出する。そして、彼らは商業ジャーナリズムに地滑りに浸入した(なお、アカデミズムからジャーナリズムへの連絡路は大正デモクラシー期に、他ならぬ吉野らが先駆的に開鑿したものだ)。『中央公論』の「論壇時評」が開始されるのはその三年後のことだ。同連載は彼らを積極的に起用していく。担当者は月ごとに異なる。そこに石濱や佐々、大森らが名を連ねた。

以上より、ふたつの転換を抽出することができる。

第一に、「社会時評」から「論壇時評」への転換。社会現象を臨床的に解説する形式から、社会現象を取り扱った論説群をメタレヴェルで整理する形式へと、時評のトレンドが転換した(もちろん、社会時評が消滅したわけではない)。じっさい、『中央公論』のあとを追うように、『経済往来』も同種の企画「論壇往来」を四ヶ月後の一九三二年七月号から開始している。しかも、「社会時評」(二九三〇・二一一二)の後継連載として、この転換は言論空間に内在するシステムの自律化の兆候を示す。言及対象が現実(Ⅱ一次的)ではないからだ。言説(Ⅱ二次的)に焦点化されている。それは境界内部の一定の成熟を示唆する。だが同時に、その自己準拠的な発語構造は論壇ジャーナリズムの内閉化を促

進することにもつながっていくだろう。内閉化は一方で議論のハイコンテクスト化をもたらす。

第二に、評価主体の固定形式から変動形式への転換。特定少数の思想家による恒常的な定点観測から、多数の批評家たちによる局所診断の集計へとモードが変成した。それはひとつの時代の終焉を意味する。すなわち、社会全域を見とおす大知識人が全体性を代表しうる時代の終わりを。社会は複雑性と流動性を増す。それゆえ、特定の知性に時代分析を一極的に期待することはもはやできない。思想家の全能への信頼が瓦解しつつあった。そこで、メディアは議論の分散化を志向しはじめる。一九三〇年代は、層状に存在する批評家たちが割拠する時代となる——私たちはこれをいくぶん乱暴に「小物群像の時代」と形容しておこう。偶発的な個性ではなく、ネットワークによって全体性が担保される。論壇時評の誕生にはこのふたつの決定的な転換が刻印されている。

では、時評はいかに書かれたのか。基本的には、毎月の雑誌群から注目すべき論説を複数紹介する。それに逐一コメントを付していく。だが、その書式は定型化されていない。担当者の裁量にゆだねられる。高橋正雄「論壇時評」(一九三一・七)は、ふたつのスタイルに言及している。

それぞれ異なるテーマを論じてゐる若干の人々について、それぞれの所説を論評してゆくのが、論壇時評の一つのやり方であることは云ふまでもない。しかしながら、同一の問題に関する多くの人々の所説を彼此対照せしめつゝ、その問題のさまざまな理解が存することを示してゆくのもまた、一つの論壇時評であらう。

ひとつは、共時的な「テーマ」の多様性を提示するスタイル。もうひとつは、同一テーマをめぐる「理解」の多様性を提示するスタイル。冒頭でそう整理した高橋は後者を実践してみせる。「政府の整理策」に「問題」を絞り、各誌前月号に発表された五本の関連論文を解説する。その際、論点別個々の論文の立場を析出する。そして、「対照」させた。高橋は自身を「議事進行係り」と位置づける。細片化された議論の束を淡々と連結させていく。そこに有機的な関係性空間が浮かびあがる結構だ。ときに、恣意的な有縁化によって文脈が仮構されもしよう。新たな論点が捻出される。特定テーマをめぐる意見群の集約的な整理作業。それは錯綜した論争状況においていっそう効力を発揮した。たとえば、住谷悦治「論壇時評」(一九三一・五)や林要「論壇時評」(一九三一・一〇)は、進行中の「地代論争」を高橋と同様の書式で整理している。その時どきの論争の更新状況を見取図にまとめる。それを読者に提供する。膠着しがちな論争の進展を効率化する媒材としても作用しただろう。理解をアシストする。

見取図作成が目的と化す。それゆえ、このスタイルの時評はいわばレジュメ形式を採用する傾向にあった。問題の核部を手早く抉出し、情報の圧縮と分類を行なう。そして、整理番号を付す。列挙する。言及対象の「要旨」として提示される二次情報の集積(佐々弘雄「論壇時評」一九三一・四)。それは、さしずめ「サブノート」と呼ぶに相応しい。先にあげた次代の論客たちは、要約の効率の遂行(レジュメ)や網羅的なサーヴェイ作成に習熟していた。アカデミズムでその種のトレーニングを積んでもいた。まさに時評作業に適任だった——新規登場する批評家に新たな思想動向の整理役やナビゲーター役が期待されるという一般的傾向をここに書き添えてもよい。

現行の出版市場のなかでマルクス主義は高い商品価値をもっていた。もちろん、そうした背景を考慮する必要がある。だが、彼らが重宝された理由はそれだけではない。むしろ、日常的な情報処理能力やマニュアル作成能力の傑出した高さが出版大衆化状況に合致していたのだ。決定的な理由はイデオロギーにはない。スキルだ。だからこそ、マルクス主義凋落以降の状況にあっても、彼らのほとんどが言論界に延命しえたのである。プロレタリア作家たちが一九三〇年代半ば以降に追いやられた窮境と対比してみるとよい。スキル要因説の正当性はあきらかだろう。

さて、論壇時評は言論の複雑化に対処すべく導入された。ならば、受容事情は容易に想像できる。ある種のガイド記事として利用されたのではないか。この推測はレジュメという形式的特徴からも補強される。序章で引用した室伏高信「二分の一ジャアナリズムの横行」(一九三二・二)の不満にあらためて目をむけよう。「この頃では、大抵な伶俐な青年は、雑誌の小説を一々読む代りに、新聞の月評をのぞいたゞけで間に合せる」。論壇時評の「流行」もこれと同じ経緯ではないか、と室伏はいう。「新しい読者心理に訴へる」装置だと。一般読者の知的欲望に欠如に即応する緩衝装置として活用された。移り気で怠惰な読者をサポートする(時間、金銭、能力の面での補助)。

とすれば、論壇時評はその読者が業界人とかかなりの割合で重なる限定市場を形成しているわけでは決してない。むしろ逆だ。エコノミカルな有用性ゆえに、数多くの一般読者を吸引する。執筆層の多様化(「小物群像化」と平行して、読者層の多様化(「読解力の多元化」)も急速に進んだ。そのとき、時評は両層の多様性を効率的に解消すべく作用するだろう。仮に評者の意図がそこになかったとしてもである。むしろ、理解の地平の完全な共有は実現しない。あくまで擬似的な共有をもたらすにすぎ

ない。しかし、その過程において、両層のあいだには人工的な仮設風土としての「論壇」が立ちあがっていく。

ただし、この場合の「一般読者」はそれでもなお、ごく限定されたセグメントを意味するにすぎない。総合雑誌の（購）読者に絞られるからだ。一定の水準を満たした読者が想定される。論壇イメー

ジが広範に通用されるには、別種メディアが必要となるだろう（後述）。ともあれ、論壇時評はその情報整理機能の利便性ゆえに重用された。いわば網羅的なりサーチの代行装置（Ⅱ下読み）として。そして同時に、内部／外部を分かち境界線を生成する役割も担いはじめていた。そこに、論壇の暫定的な輪郭が結像する。言論が空間化される。

だが、次の点に注意しなければならない。完全に透過的な整理作業などありえないということだ。いかなる条件においても。少なからず評者の判断・立場が反映されてしまう。前述の高橋正雄は時評の末尾をこう締めくくっている。Ⅱ「論壇時評においても、もし学校教師風な評点が許されるならば、さしあたり、井上「準之助」氏は優、久保寺「三郎」氏は良、他はみな可か不可でもあらうか？」「議事進行係り」に徹してきた禁欲公平ぶりは括弧入れにされる。「学校教師風」に振るまう。そして、裁断的な「評点」を書き入れる。ここには、あからさまな序列化のまなざしが露呈している。末部まで評者の私的な発話位地は抑圧されていた。それが一挙に表面化する。

しかし、それでもまだ「教師」的な採点は建前としての公平性に支えられている。より極端には、私的な怨嗟まで反映するケースもあった。たとえば、大森義太郎「論壇時評」（一九三一・六）。そこで大森は東京帝国大学経済学部の保守派教授陣を痛烈に批判する。時評の体裁を維持しながらも、内実

としては評者自身が渦中にある論戦の延長で書かれている。ここから予想されるのは、論壇時評もまたひとつの見解として相対化されるということだ。その是非が問われる。それはさらなる整理作業を誘発するだろう。論壇時評は公平性を担保する（ことを期待された）半ば公的な空間である。しかし同時に、極私的な意見表明の場にも転化しうる。この二重同時所属性に強く規定されたメディアだ。そのため、多くの問題呼び込んでしまう。事態は存続の条件にかかわる。

『中央公論』「論壇時評」は、一九三一年一月号を最後に突如誌面から消失する。Ⅱ『経済往来』「論壇往来」も一九三二年二月号で終了。この早期打ち切り（Ⅱ九ヶ月、八ヶ月）の背景にはいくつもの要因が推測できる。なにより、当時の雑誌の誌面構成はおそろしく偶発的であった。流動性が重視された。他誌との苛烈な競合関係のなかでたえず柔軟に企画を変形させていく必要がある。掲載記事はそのつど相対的に決定されるだろう。誌面は物理的に有限だ。ある瞬間に重要な企画が出現すれば、そうでないものはおのずと淘汰されてしまう——本書で順次検討する一連の記事様式が定着したのは偶然の結果でもあった。流動性重視は誌面のマンネリ化解消のためでもある。目先の切替えを試み続けなければならぬ。したがって、適者生存の原理とすらいえない。人材払底も考えられよう（『中央公論』「論壇時評」は担当者再用を意図的に回避している）。とはいえ、これらはいずれも瑣末な事由にすぎない。別の水準に焦点を絞ろう。

それは同種メディアが検討対象であることと関係している。以下の三点に要約できる。

第一に、他誌批判の問題。上述のとおり、時評には評者の立場性が流入する。とうぜん、他誌掲載論説への批判的な解説もしばしばなされる。そのことは競合誌とのあいだに不要な亀裂を生じさせか

ねない。むろん、自誌の(潜在的な)書き手でもある批判対象とのあいだにも。第二に、利他行為の問題。他誌論文への言及は、意図せずして競合誌の宣伝効果をもってしまう可能性がある。褒め評であれ、貶し評であれ。それは利敵行為を意味する。販売戦略として適切ではない。この二点は主に《雑誌／雑誌》間の問題だ。

第三に、自己言及の問題。これは《評者／雑誌》間の問題である。同一媒体(つまり時評掲載誌)の論説を時評で言及する場合には、少なからぬ配慮が評者のなかで働かざるをえない。容易に想像されよう。評価が否定的であるなら、依頼主体(＝編集者)への背礼を意味する。肯定的であるなら、内輪褒めという過剰な印象を第三者(＝読者)に与えることになる。前者の事態を回避すべく肯定すれば後者の事態に陥る。その逆も同様。完全に中立的な紹介など不可能だ。雑誌の自己言及は必ずこの陥穽にはまってしまう。ここで、自誌掲載の論説を暗黙裡に除外するという選択肢は想定できない。時評の条件である最低限の公平性を満たさないからだ。のみならず、言論状況の俯瞰作業として不徹底である。いずれにせよ、雑誌経営上の難点を孕む。

同種メディアが検討対象であることは遅延問題にも直結する。ここでいう時評は月刊誌ベースである。そのため、つねに一ヶ月前に発売された雑誌の論説を取りあげざるをえない——しかも、その論説の多くはさらに一ヶ月前の社会的出来事を扱っている。速報性の欠如を意味する。当時、情報の伝達速度を重視する思考が蔓延していた。大衆消費社会にあつて「スピード」が強烈に意識されはじめていた。流行語にもなる。ならば、「月遅れ」という時差は商品として致命的だ。

ことほどさように、総合雑誌を媒体とした論壇時評は多方面で抵触する。複層の「困難」が折り畳まれていく。そして、その「困難」は前述の多重帰属性にこそ起因する。すなわち、時評記事が個々の担当者の私的発言でありながら、同時に、その掲載欄は雑誌主体の半ば公式的な立場表明の場としても受容され、さらには公平性までもが過剰に期待されるという性格。すべてはここから導き出された(補論参照のこと)。あらかじめ、論理内在的なアポリアを埋め込まれている。それゆえ、早期終了という結末を招来したのである。

この意味で、最終回分のスタイルは示唆的だ。担当者の平貞蔵は各誌前月号の論説をひとつも取りあげない。つまり、時評行為そのものを放棄してしまっている。社会現象を報道的に解説するにとどまる。それはむしろ社会時評に接近する。論壇時評が直面した「困難」＝限界を体現するかのようだ。その後の総合雑誌には、代替的に「社会時評」や「思想時評」と銘打たれた記事が増殖する。それらは必ずしも論説紹介を課題としない。言及対象は現実(＝一次的)へと揺り戻される。

では、論壇時評は本来的に不可能なのか。むろん否だ。先引箇所で室伏も「近頃流行し出した」と観察していた。一九三二年のことである。たしかに論壇時評は「流行」した。ただし、メディアを替えて。そして延命していく。

3 空間画定と再帰性 学芸欄の論壇時評

一九三二年一月、『東京朝日新聞』学芸欄に猪俣津南雄なまお「論壇時評」が載った。一月八日から

一〇日にかけての連続掲載だ。以後、「論壇時評」(一九三一年一月より)、「論壇月評」(一九三二年四月より)、「n月の論壇」(一九三二年八月より)と改題していきながら、毎月の論壇時評が連載される。一五〇〇字前後のテキストを月末か翌月頭に四、五日連続で掲載する方式を採る。担当者は月ごとに交替する。

この試みは開始直後に形式ごと『読売新聞』文芸欄へも伝播した。一九三二年初頭に、「評論時評」(二月)、「論壇批判」(二月)と表題のゆらぎを経たのち、二月二十五日から二八日の室伏高信「論壇時評」をもって名称の定着を見る。ここから、欄名の専用をめぐる二紙間の水面下でのせめぎあいを発掘することも可能だ。たとえば、『読売』の「論壇時評」採用を受け、『東京朝日』が差別化のため改題したという推測は十分成立する。ともあれ、「論壇時評」は一般概念として認知される。そして、広く流通していく。

『中央公論』「論壇時評」終了と『東京朝日新聞』「論壇時評」開始とが完全に踵を接する——さらには、『経済往来』「論壇往来」終了と『読売新聞』「評論時評」開始とが。この时期的な符合は偶然にすぎない¹⁵。だが、それゆえに、きわめて有徴的な意味作用を孕む。そう、論壇時評は端的にその居場所を移したのだ。雑誌から新聞へと。この移設により、前述の諸問題はことごとく解消される。検討対象と直接の競合関係にない。そのため、比較的自由な論評が可能となる。そして、雑誌発売から数日以内の紹介が実現する(一九日発売の雑誌を同月二八日に批評するなど)。同時に、形式上の修正を要した。新聞紙面に特有の字数制約という条件が加わる。そこで、分割掲載に切替わる(記事の連日分載は学芸/文芸欄の定例だ)。また、時間短縮の結果、執筆者の負担が増大する。連続担当はさらに難しくなった。あわせて、担当可能な候補者もかぎられる。そこで、若手批評家に発注が集中するという循環が発生した。

事態は媒体間の移動と形式上の改変にとどまるのか。新聞掲載の論壇時評へと考察対象を移そう¹⁶。

林癸未夫は論壇時評「自由主義者の占拠」(一九三三・四・六)で以下のように指摘している。数年前のマルクス主義全盛期に比べ、言論に「実証的、帰納的なものが目立つて多く、抽象的、独断的なものが次第に影をひそめつゝある」。大半の論説は「当面の実際問題」と密接に相関する。それ自体は歓迎すべきことだ。しかしながら、その点を追求するあまり、ある弊害が発生した。「論文の筆者が多くの場合ジャーナリスト的傾向を有する人々の間からのみ選択され」ているのだ。「職業的論作家」に雑誌が占拠される。彼らは「常に問題のハシリをとらへて、手取早く器用な文章」を作成する。林は「商品化された雑誌の論壇」の現状に苛立つ。進行する言論「商品化」への違和。この不満は書き手たちだけにむけられたものではない。むしろ、彼らを「選択」し差配する雑誌編集者たちにこそ突きつけられている。問題は編集方針だ。林の論壇時評は雑誌メディア全体への批評に傾斜していく。メディアに対する批評意識の獲得。それこそが雑誌から新聞への移設による帰結だ。個々の記事のみならず、雑誌の編集方針までもが議論の対象となる。論壇時評は雑誌ジャーナリズムの成熟期に、いわばそのチェック機関として存在した。

とはいえ、新聞における雑誌批判はさほど目新しい現象ではない。以前から「雑誌評」形式は存在した。あらゆるジャンルの主要雑誌を順次寸評していく固定枠記事だ。なかでも、『東京朝日新聞』

常設の「n月の雑誌」欄は、六〇〇字程度ながら（ゆえの）辛辣なコメントが話題を呼んだ。一九三一年一二月以降は「豆戦艦」という表題が付け加わる。匿名批評流行の先駆となった経緯の詳細と分析は第5章に譲ろう。この雑誌評において、論壇時評と近似する作業はすでに実施されていた。にもかかわらず、並行して論壇時評が設置された。なぜか。結論からいえば、機能分化と議論深化の必要が生じたからである。

雑誌評は雑誌業界の網羅的点検を目的としている。各月数回にわたる小コラム群を総合することでそれが可能となるよう設計されている。「月刊雑誌の編輯ぶり、各論文学作品を、比較評価」することに特化する（天津伝書「匿名批評界のこと」一九三六・四）。だが、実態は網羅的とはいいがたい。あきらかに文芸方面に傾斜してしまう。商品価値のより高い対象を優先した結果だろう（日本の言論ジャーナリズムはつねに文芸に牽引されてきた）。あるいは、匿名担当者がじつところ文学関連の批評家——青野季吉や杉山平助——に局限された結果でもある。ともかくにも、政治や経済、思想など他領域は副次的にならざるをえない。さらに、ゴシップの文体を基調とした短評形式は対象の記述内容に踏み込んだ分析を遮断する。

こうした条件は肥大化と複雑化が昂進する言論環境に対応しえない。そこで、論壇的事象を文芸空間から、そしてゴシップ空間から、完全に剝離することが要請されたのだ。論壇時評欄には「論壇」という限定がかけられている。限定を明記し独立的に存在する。その存在したいに当該欄設置の最大の意義があった。非在を対象に掲げるのだから。

なにおいても、評者たちはひとつの問いに対する認識表明を迫られることになる。むろん、《論

壇」とはなにか》というあの問いだ。雑誌評には見られなかった要件である。整理しよう。まず、「論壇時評」という枠組が与えられた。そのことにより、評者たちはあらためて（あるいははじめて）自身の属する（らしい）「論壇」という場Ⅱ空間をめぐる思考へとむかった。安定した実体として論壇が存在するのではない。それは先行しない。そうではなく、論壇時評が発明されることではじめて、論壇（適行的に）感知せんとするまなざしが作動したのである。その認識がゆるやかに共有される。結果として、論壇は言説的に構築されていく。注意しなければならないのはこの転倒した起源である。そして、その無根拠性である。

では、《「論壇」とはなにか》という問いへの回答はどのようなものか。多くの場合、言及掲載誌の選別によって間接的に示される。たとえば、経済評論家の高橋亀吉は時評「雑誌編輯者へ」（一九三二・六においてこう断定する。「論壇批判の対象は、多くは、中央公論、改造」、「文藝春秋、経済往来等に限られる」、と。つまり、四大総合雑誌によって論壇が構成されるという一般的了解に目配りする。そのうえで、『東洋経済』『経済情報』『エコノミスト』など経済誌の重要性を提議し、それらの解説を披露した。経済領域のプロパーたる高橋自身の地政学的な言論認識図が時評に投射されている。ここにかがえるのは論壇構成素の拡張力学だ。

また、大森義太郎の論壇時評「文学的論文」（一九三五・二）は、「理論的な文藝論文」を対象に組込むべきだと訴える。大森は当時、経済学者ながら「行動主義文学論争」の中心に位置した（詳細は第3章）。そのこともあり、『行動』『新潮』など文芸誌に掲載された批評群をビックアップする。行動主義文学論を文学固有の問題圏に囲い込まず、より公共性を帯びた討議空間へと情報転送する。そうし

た機能をはたしているのだ。文芸時評の領分をも侵犯する。論壇時評でありながら文芸時評も兼ねる。両属型の時評になっている。このように、論壇時評は自明視された境界上に侵襲作用を発生、促進させる。そうすることで、たえず複数領域の批評の配置Ⅱ地図を組替え続ける。場合によっては、文脈の接面に新しいタイプの批評(家)が派生することもあるだろう。そのハイブリッドな批評がまた地図を塗り替える。

とすれば、『論壇』とはなにか』という問いへの回答は、固有名の揭示によってもなされるはずだ。とりわけ重要なのは、新たな書き手の名を記載するケースである。たとえば、哲学者の谷川徹三は論壇時評「下らぬ巻頭論文」(一九三二・五)のなかでそれを実行している。「戸坂潤」や「本多謙三」といった固有名を記す。そして、総合雑誌の巻頭論文を彼らに書かせるべきだと提言する。また、大森義太郎の時評「学術的な論文」(一九三五・二)は「宇野弘蔵」をあげ、「論壇でもつと活躍されることを望みたい」と要望を表明する。ここからは次のことがいえる。

文壇共同体はギルドのごとく人的紐帯を前提とする——それがとうに幻影であるにせよ。ところが、論壇はそうした具体的な親密圏を権威・担保としない(まったく存在しないわけではない)。それゆえ、成員資格や参入条件が不分明だ。そこで、論壇時評がリクルーティングの機能をはたす。人的資源を新たに投入Ⅱ登記する仲介者役を担うのである。しだいに、メンバーシップの決定機関としてプレゼンスを増幅させていく(時評を参考にした雑誌編集者が新たな書き手に執筆依頼する情景を想像せよ)。裏返せば、論壇時評を介して一定のスクリーニングが作動する。結果として、ゲートキーパーとしての機能をもつ。かくして、承認と排除のシステムが成立した。

谷川や大森の推挙した新世代の論客たちは、いずれもアカデミズムの素養に裏づけられている。そもそも大森の時評は表題が示すように、「学術的な論文」を論壇・文壇に本格的に導入せよという主旨であった。当然ながら、こうした人員更新の試みは反発を誘引する。多くは旧世代に属する論客から発せられた。なかでも室伏高信はアカデミックで精緻な批評の跋扈を折に触れ悲観している。その悲観的な現状分析を論壇時評に盛り込む。たとえば、時評「素人の登場」(一九三四・二)。ここでは、「職業的な評論家は次々へと滅びた」と断言する——この場合の「職業的」は非学術的であることを意味する。いわく、近年の論壇ジャーナリズムには「大学の助教授や懸賞論文の応募者」が陸続と登場する。しかし、いずれもメディア的消費財として作りあげられているにすぎない。室伏はここに「評論の俗悪化」を見る。思えば、序章で参照した室伏の時評のタイトルはきわめて示唆的であった。「二分の一ジャアナリズムの横行」。それは、「半ばジャアナリズムであり、半ば講義であることが今の雑誌評論の共通した型である」という現場認識を表現した造語だ。

では、「二分の一ジャアナリズム」の何が問題なのか。室伏は論説「評論壇の昂揚」(一九三三・三)でこう述べる。「評論の専門化、技術化、[……]局部的進化の著しい発展」が観察される。テクニカルで局所的な論議ばかりが増殖する。そこに「技師はあるが思想家はない」。不足しているのは「思想家」だ。「全体性においてとらへ」る思想家である。室伏はこの「全体性」に執着した。

不満の所在ははっきりしている。吉野作造や長谷川如是閑に代表される思想家Ⅱ総合的知識人たちが——大正期のいわゆる文明批評家とおおむね重なる——によって構成された言論空間への回帰を希求しているのだ。そこには、言語の圧倒的な能力が満ちていた。社会全域に指針を与え採舵していくタ

イブの言葉の力が。そのつど、グランドデザインが描出される。少なくとも室伏にはそう思えた。室伏は大知識人の姿をしばしば「予言者」になぞらえる(「チャーナリズムとセンセシヨナリズム」一九三一・二)。講壇ジャーナリストたちの情報処理の小「器用」さ(前掲林)はまさにその対極にあった。じつ、講壇批評は静態的分析を基盤としたシニカルな現状追認に陥りがちである。だがそれは、個々の論客の性向というよりは、批評のモードに由来する。いまや、時評的な思考様式、つまりレジュメ的知性がジャーナリズムを急速に侵蝕しつつあった。¹¹⁾

室伏の不满はこの状況にむけられていた。とすれば、先ほどの林癸未夫と同型の不満であるといつてよい(「職業的」の含意の相異には注意しておこう)。室伏や林の時評は現論壇への批判という形式を採る。その批判の前提・根拠には、総合的知識人像へのノスタルジーがあった。それを実践倫理的な基準として、論壇の軌道修正を試みている。「技術」から「思想」へ。そして、「局部」から「全体」へ(室伏)——長谷川如是閑の論説「技術を捨て大局を立て——現代評論壇に与ふ」(一九三三・四)はまさにそれを端的に表現したタイトルだ。ここに見られるのは、《「論壇」とはなにか》という概念規定をめぐる問いの構えではない。《論壇》とはなにか、あるべきかを指し示す嚮導的態度だ。論壇時評での提言を論壇動向にフィードバックせんとする言説戦略が垣間見える。

以上のように、論壇時評は輻輳的な展開を見せた。要約しておこう。論壇時評は、一方では情報整理を提供する装置として成熟した(たとえば新世代の講壇批評家)。私たちはそれをさしあたり小物群像によるレジュメ的知性と呼んだ。新聞メディアに包摂されたことで、批評的実践よりも報道的論理に寄りそったディスクールが優先される。他方では、論壇をたえず監視・批判する再帰的言説と。これは何を意味するのか。いくつか補助線を引き入れていこう。

4 メディア論の予感 相互批評の交叉点

一九三二年四月、雑誌『思想』は「哲学時評」欄を設置した。初回担当者の廣見温はこう書き起す。「時評の中心が文壇から論壇へ移されつゝある」。文芸時評の停滞と論壇時評の隆盛とを単純に対照させた印象論だろう。「中心」という語にそれ以上の含意はない。やはり、論壇時評が文芸時評と対で語られる。序章で引用した三木清「批評の生理と病理」(一九三二・二)も同年、「論壇時評や文芸時評」の順で並べ言及していた。¹²⁾そして、本章冒頭の戸坂潤も文芸時評との比較で解説した。私はちああとでこの点を検討することになる。

ここでは別の現象を絡ませておきたい。先述のとおり、新聞に論壇時評が定着したのは「一九三二年」のことだ。前後して、哲学時評をはじめ多数のジャンル時評が各種媒体で試行された。映画時評やラジオ時評、演劇時評、学界時評など(ただし、いずれもこの時期が初出というわけではない)。接

合させるべきはそのうちのひとつだ。同年、各種雑誌に新聞時評が定着している。

『文藝春秋』一九三二年四月号に、S・V・C「新聞紙匿名論評」が掲載された。翌月には「新聞紙匿名月評」と改題。連載がはじまる。³⁶ また、『中央公論』でも一九三二年九月号以降、「新聞時評」が常設された。担当者を毎回交替させながらしばらく継続する(初回は馬場恒吾)。他誌でも類似の新聞批評が頻出するようになる。石濱知行「新聞が批評の題目となつた歳(一九三二・二三)は、見出しが物語るとおり、この新たな傾向を「一九三二年」の論壇の「特長」のひとつとして明記した。³⁸ 先行して、新聞の原理的な考察(新聞論)も活性化していた(戸坂潤「新聞の問題」は一九三三年初頭の段階で、「この一、二年來、急に新聞が人々の問題に、客観的な問題になつて来た」と見る。³⁹)

ここでたどられた経路は論壇時評のケースと同型だ。馬場恒吾は「新聞時評」の開始にあたって、ある傾向を指摘している。⁴⁰「一般の新聞が同業者間の批評を差控へる」というのだ。新聞批判は新聞メディア上では成立しがたい。その理由については、雑誌掲載の論壇時評が躓いたあのアポリアと同種の説明が可能である。新聞批評は雑誌メディアで展開されなければならなかった。

事態は単純だ。新聞は雑誌を批評する。そして、雑誌は新聞を批評する。「一九三二年」をひとつの転機として、メディア間における相互批評の基本構造が完成したのである。

とはいえ、当時はメディア一般を指す語彙を認識を欠いていた(日本では戦後を待たねばならない)。「ジャーナリズム」というタームによって補填される。一九三〇年前後に、日本のジャーナリズム空間は一定の成熟を遂げた。そして、自律運動をはじめた。それはジャーナリズム論や編集論など再帰的言説の隆盛に象徴されよう。自律化は内閉化をもたらす。と同時に、内閉化は内部ジャンルの制度をおこす。ことは論壇の輪郭の不安定性にかかわる。

三木清はエッセイ「批評の生理と病理」(前掲)のなかで次のようにいつている。⁴² 他ならぬ一九三二年に発表された。

「本来の「批評」は「公衆」の会話のなかにこそある。それに対して「いはゆる批評家即ち物を書く批評家はそれが読まれるために、だからそれ自身がまた批評されるために書くのである。批評家の書いた批評は話される批評によつて批評されるのみならず、それは再び「論壇時評」や「文藝時評」などの如きにおいて他の著述家的批評家によつて批評されるであらうし、そしてこの批評もまた更に批評されるであらう。批評家といふのは批評する者のことではなく、批評される者のことである、と云はれてよいほどである。

批評に埋め込まれたプログラムが描き出されている。批評は「書く」ことで成立するのではない。他者に「批評される」ことによつて円環を結び、はじめて成立するのである。三木も述べるように、その他の批評もまた別の批評の対象となる。そして存在を認知される。それを可能にした批評もまた批評される……。この批評行為の無限連鎖は連鎖の過程においてそのつど空間Ⅱ場を出来させる。

その空間はときに「論壇」と名指されもするだろう。ならば、空間の外延を規定する審級はどこにあるのか。

私たちはそれを、たとえば論壇時評の動作に見出すことができる。個々の批評は、必要に応じて、直接的な参照を行なう(明示/非明示を問わない)。相互に参照しあう。参照の交換の連鎖はゆるやかなネットワークを形成するだろう。ところが、論壇時評は参照をはじめから目的に設定している。あるいは、参照の局面こそを批評対象とする。相互参照の体系IIネットワークに焦点をあて、それを復元的に転写するのである。その先にさらなる連鎖を発見/捏造していく。ときに、仮現的に補完することもあるだろう。メタレヴェルから批評テキスト間のリンク構造を抽出・明示する。そうした間接的で媒介的な機能に特化している。具体的な自己言及を引こう。

経済学者の有澤廣巳は時評「マルクス主義戦争論の検討」(一九三二・一〇)でこういう。「論壇は一人の評論家ではなし遂げえないことを「……」、全体として完成しつつかある」。その一例として次のとおり続ける。「長谷川」如是閑氏が「戦争の階級性と民族的昂奮」(改造)において「説いて及ばなかつたところを、向坂逸郎氏は「マルクス主義と民族性の問題」(中央公論)で取りあげてくれる」。長谷川如是閑と向坂逸郎のテキストは必ずしも同じ文脈にむけて差し出されたわけではない。それらが論壇時評において次々と有機接合されていく。また、笠信太郎「新秋さびし」(一九三三・八)は次のように述べた。「諸雑誌は、みな、この眼前にむくむくと盛上つた「戦争危機」という情勢を、そのままには取りあげないで、切れ切れにして、それぞれのトピックとして「……」提供した。「情勢」が「切れ切れに」分割され論じられる。笠は個々の「トピック」を洗い出し、手際よく接続してみせる。

これが論壇時評の効力だ。個別領域へと分極化した言論を立体的に再縫合II編集する。そのような場として機能する。そこに論壇が「全体として」(有澤)、仮構的に可視化されていく。言論に関する地政学的な認識の構図が実体化するかに見える。では、こうした「全体」への志向はいかにして作動可能となるのか。いささか図式的ではあるが、これまでの議論を振りかえりながら整理しよう。

まず、雑誌間に相互批評が発生した。それは競合他誌への褒貶を多分に含む。ゆえに、様々な都合を引き起こしかねない。そこで、雑誌に関する批評は新聞へと媒体を移した。それと同時に、雑誌で新聞批評が加熱しはじめた。いつてみれば、メディア間(新聞/雑誌)で批評の交換が行なわれる。このとき、書き手は自らのポジションを強烈に意識せざるをえない。すなわち、いま自分がどのような媒体において、どのような媒体を批判しようとしているのかを。それは新聞/雑誌の書き手がかなりの割合で重複したためでもある。媒体に応じた書法の変更が要求される。その意識化の過程で、雑誌性や新聞性といった漠たる観念が相互排他的に構築されていく(雑誌ではない、新聞/新聞ではない、雑誌)。典型的には、雑誌論や新聞論の隆盛として出力されよう。当時、「新聞の雑誌化」/「雑誌の新聞化」と形容される現象が観測された(第5章で論じることになるだろう)。じっさい、そうした現象の行き着く先が懸念されもした。その種の議論も両観念の成立を經由してはじめて可能になったものだ。

このように、相互批評は新聞/雑誌という個別メディア相互の差異を隠らずも露顕させる。だが、差異の認識は同時に差異の前提II基盤となる上位の同属性への意識をも喚起する。ここではメディア一般を指す。さらに抽象化しよう。

一方向的な批評行為は主体と対象のあいだに上下の位階差を設定してしまう(垂直関係)。ところが、双方向的な批評行為は同列的な対話の場を生成する(水平関係)。互いが互いの対象となる。ゆえに、上下の落差が発生しない。この平面が認識のプラットフォームとなる。そして、低位区分としての雑誌メディア／新聞メディアを包摂する。かくして、一般的な意味での「メディア」概念が認識論的に立ちあがる。ただし、当時の人間は「メディア」という語彙をもたない。それは「ジャーナリズム」という用語において漠然と思考された。ジャーナリズム論の隆盛はその証左にほかならない。

私たちはここにメディア論の萌芽を認めることができる。可能態としてのメディア論を。未完のメディア論を。この段階では、雑誌論や新聞論が断片的に披瀝されるにすぎない。しかし、それらはいずれ融合を見せるだろう。そのとき、本格的なメディア論が現出するはずである。有澤や笠の論壇時評は雑誌メディアの「全体」を指定するにとどまった。新聞時評も同様だ。メディア一般に言及することはない。当時のジャーナリズムに不在だったもの、それは全体性を志向する超越的な発話位地だ。その志向を支える枠組も書法も出揃ってはいなかった(ゆえに、メディア論的要素の過剰な剔出行為は遠近法的倒錯にすぎない)。時代的な限界が看取される。

この限界は同時代にもいくらか自覚されていた。たとえば、茂倉逸平「新聞学藝欄時評」(一九三四・六)はこう述べる。⁴⁰「新聞が毎月雑誌を対象として批評して来たやうに、今後雑誌が新聞の学藝欄を継続的に批評の俎上に乗せるといふことになれば、相互の向上に資するところは多い」。メディア間に発生した相互批評の「継続」を期待する。その際、「最う一段専門化する必要」が付言されもした。この「専門化」の先に未到のメディア論が胚胎していた。そして、「批評の俎上」にのった「雑

誌」と「学藝欄」の交点に論壇が仮構されていく。

いましばらく、当時のメディアをめぐる思考の限界と可能性の狭間に拘泥してみよう。

『文藝春秋』一九三三年一月号のS・V・C「新聞紙匿名月評」は、『東京朝日新聞』の論壇時評を取りあげている。その論評にかなりの紙幅を費やす。⁴¹つまり、雑誌掲載の新聞時評が新聞掲載の論壇時評を批評している。そう、論壇時評も「更に批評される」のだ——まさしく三木が述べていたやうに。媒介的中間項に終わらない。メタ言説までもがオブジェクトと化す。そして媒介される。この事例は「批評」の主体が新聞時評であることでより錯綜する。これにとどまらない。同月評と数日違いで、『東京朝日新聞』に馬場恒吾「新聞時評を評す」(一九三三・一二)が発表された。⁴²そして、『読売新聞』に新居格「新聞批評の批評」(一九三三・一二)が。内容はともに表題が物語るとおりだ。新聞掲載の論壇時評において雑誌掲載の新聞時評を批評している。

論壇時評／新聞時評は雑誌／新聞を交叉的に批判し監視する。それらをめぐって、当の時評間でさらなる相互批判し監視のメカニズムが作動する。より上位の審級獲得を目指したメディア間抗争と解釈してもよい。メタレヴェルの言説をさらに高次(メタ)の視位から整理・観測し尽くさんとする欲望。この欲望は何に由来するのか。源泉は論壇時評や新聞時評の本来的な対象設定と密接にかかわっている。すでに触れたやうに、論壇時評は一次的な現実を対象としない。二次的な言説を批評対象に据える。いふなれば、三次的な言説形式を備えている。新聞時評も同様だ。このメタレヴェルの昂進性が合わせ鏡のやうに相互へとむけられたとき、最終審級の無限背進が起こる。

とすれば、論壇の空間画定が論壇時評によって担保されたとする断言は正確ではない。少なくとも

事態の半面しか捉えられてはいない。ふたつ(あるいはそれ以上の)時評ジャンルが対峙線を描く、その等距離的な批評態度において「全体」の地平が構成される。私たちの認識はそう更新されなければならぬ。論壇はこの折り重なるメタ性/媒介性を動力として出来る。だからこそ、論壇時評は意図せずしてメディア論的思考へと接近したのだ。

5 消滅と転生 自己準拠的なシステム

論壇は自律分散的な言説ネットワークの集積からなる。ただし、そのネットワークの存在や形状は必ずしも自明ではない。そのため、自己準拠的な統制システムを内蔵させる必要があった。論壇が制度化していく過程で、論壇時評という視座Ⅱ装置が導入された。雑誌メディアと新聞メディアの交叉点に。論壇時評は論壇の不定形な輪郭を規定する。そのつどのメンテナンスを期待されるメディアである。その期待が時評を延命させた。規定の当否は問われない。なにより、「論壇」に特化した時評の存在が意味をもつからだ。むしろ、その境界は非固定的である。複数の内部評者によってたえず調整される(交替制による評点の複数化)。境界画定行為の連鎖と集計が場を存立させる。それゆえ、論壇の自画像はどこまでも相対的で暫定的なものにとどまるだろう。実体化Ⅱ前提化から逃れ続ける。

まとめよう。

論壇時評は言論の網羅的な点検を代行する。と同時に、言論の動向をたえず監視・批判する再帰的な言説でもある。したがって、論壇の存在を前提として選別や批評を展開する機関ではない。そうではなく、時評を遂行する、まさにその営為によって論壇を言説的に存立させていく装置である。場や文脈をそのつど可視化させていく。空間に対して構成的に作用する。すなわち、論壇時評の対象は論壇時評そのものによって生成される。ありのままをスケッチするのではない(無形なのだから不可能だ)。何が論壇的事象か。誰が論壇構成員か。それは事後的にしか決定しえない。この決定機能によって論壇は構築/発見される。私たちはこの転倒関係をめぐって進んできた。

ところが、ひとつの問題が残る。本章冒頭の戸坂潤による論壇時評の自己言及だ。じつのところ、戸坂は特定テキストにほとんど言及していない。若干存在する言及箇所も例示の手段以上ではない。奇妙なことだ。論壇時評でありながら、「時評」が主眼ではないかに見えるのだから。ならば、ここでは何が実行されているのか。論壇時評というフォーマットそのものの可否に議題を限定し続ける。最後まで。他ならぬ論壇時評において。ここまでの議論に照合するならば、いささかイレギュラーな現象だ。なぜ、そのような時評は書かれなければならなかったのか。

戸坂は論壇時評の「困難」を説く。本章はこの発言を出発点とした。じつは、「困難」には二重の文脈が溶かし込まれている。ひとつは、論壇時評それ自身のもつ内因的な「困難」。それは形式論理から導かれる。すでに詳述した。では、もうひとつは、それは、論壇時評をとりまく環境の変化に随伴する外因的な「困難」だ。時代状況を組み考える必要がある。新聞メディアは「大衆的な普及性」をもつ⁵¹。それゆえ、雑誌以上に「制限」がかけられた。とりわけ、「政治的意見」に対して。時

局にかかわる発言が制縛される。ときに直接的に。とうぜん、時局進展に応じて、政治や経済、外交など現実領域の政策決定に言及する論説を扱う論壇時評も無関係ではいられない。おのずと萎縮せざるをえなくなる。戸坂はその状況も含め「困難」と名指したのだ。

戸坂の時評が発表されたのは一九三六年九月のことである。その段階において、新聞での論壇時評はすでに形状を変えていた。なにより、毎月の連載ではなくなっていた。『東京朝日新聞』の「n月の論壇」欄と『読売新聞』の「論壇時評」欄は、そろって一九三六年四月に常設を停止する。この場合は偶然ではない。経緯は時期から容易に察知されよう。二・二六事件後の情勢急変に即応している。以後、論壇時評は間歇的な不定期掲載へと切替わる(さらに、一九三七年七月の日中全面戦争の勃発と、その混迷化を受けた翌三八年九月の新聞用紙制限令の実施以降は、紙面の物的制限のためにほとんど存続不可能となる)。戸坂の時評はこうしたコンテクストにむけて差し出されていた。

そう、一九三六年当時、「論壇時評」は論壇時評にもっとも相応しいトピックにはほかならなかった。戸坂は時評を放棄したわけではない。論壇時評が直面した「困難」を提示する行為に仮託して、ある認識を黙示している。すなわち、閉塞した論壇ジャーナリズムを現実空間へと再接続する必要を。しかし、それは直截的には語られない。語る行為を封鎖する言論環境が存在した。それは前提である。二重底的に示されるのは論壇の現在だ。日中開戦を目前にして、言論の構造は転形を余儀なくされはじめていた。

さて、この時点で興味深い現象が起きる。総合雑誌に論壇時評が復活するのだ。再度の転位が起こる。『日本評論』一九三六年八月号に、S・O・S「論壇時評」が発表された。匿名形式だ。匿名化

の所以は自明だろう。以降、同誌は論壇時評を長期連載する。目玉記事として継続させた(一九四〇年以降は、匿名による批評行為が許容されなくなり、実名・短期交替制に変わる)。「中央公論」も短期的に「論壇月評」欄などを開設した。他誌にも類例が確認できる。だが、私たちの関心はもはやその詳細内容にはない。重要なのは形式である。時局進展により新聞内に存続できなくなった論壇時評が再び雑誌メディアへと還流したという、その運動の軌跡だ。

論壇時評はメディア間を回遊する。自らの居場所を探索するかのよう。その航跡は生態的でさえある。転変するメディア状況を陰画的に随時反映している。そのつど、メディアの臨界点を如実に指し示した。転位の要因は時評のメタ性に集約される。再言しよう。

論壇時評は現実を直接の対象としない。現実(Ⅰ次)を扱った言説(Ⅱ次)に照準設定する。三次的な言論形式を備えている。このメタレヴェルの昂進性が入り組んだコミュニケーション構造を招来した。文芸時評との相異はこの昂進の度合いにある。文芸時評の批評対象は文学作品である。作品が一次的現実と相当する。時評はそれを扱う二次的な言論形式になっている。文芸時評と一般的な文芸批評は並列的な布置関係にある——前者は後者を例外的にしか扱わない。そこには現実空間が欠落している。現実社会をいったん消去した自律的な内閉空間で議論が成立する。閉鎖系へと内向していく。その自己完結的な空間は文壇とおおむね重なる。何を「現実」と見做すか。それは相対的に決定されるだろう。留意すべきは、論壇時評と文芸時評のあいだに存在した位階関係の相異だ。批評のもつメタジャンル性こそが正しく検証されなければならない。

私たちはあえて線形的な履歴Ⅱ物語をたどってきた。ジャンルとしての論壇時評に主体的意志を透視するようにして。いうまでもなく、仮視されたその主体性は同時代のジャーナリズム空間に内在する他の様々なシステム群との差異関係から消極的に炙出されたものにすぎない。とすれば、次に着手すべきは、その図と地を反転させた別の履歴Ⅱ物語たちの精査だ。それらは相互排他的に構成しあう関係にある。特定ジャンルの論理と変容の軌跡とを解明すること。周囲の他のシステムにも同じ作業を施すこと。そして、一連の成果を逐一つきあわせてみることに。そうした作業を経ることで、ようやく一九三〇年代のジャーナリズム空間の漸近的な回復は可能となるのだろう。以降、作業を順次遂行していく。

まずは、論壇時評と対照させるべく、それに先行した文芸時評の検討に取りかかろう。次章の課題をそこに定める。

補論 時評の公平性について

河合栄治郎は「非常時局特別評論 第一回（一九三七・七）のなかで「文藝時評」と「論壇時評」の双方に言及している。⁵⁰ただし本筋ではない。該当箇所はこくわずかだ。いわく、「之らは筆者を批判し、読者の批判力を高める使命を持つ」。一見素朴なこの定式を梃子に議論を補綴しておく。

ここで、時評にはふたつの機能が期待されている。ひとつは、月々の膨大なテキスト群を「批判」Ⅱ監視する機能。それは本論で触れた。主に「筆者」に宛てられる——間接的には、周辺の文壇・論壇構成員、さらには編集者らにもむけられるだろう。だが同時に、時評の「読者」にも受容される。当然だ。では、どのようにして。「批判」の振るまいそのものが影響力をもった。すなわち、誰の、どの、テキストを取りあげ、どのように批判しているのか。叙述態度が全的に把握される。評者は《誰のどのテキストをいかに読解すべきか》を遂行的に示す。それが時評のもうひとつの機能だ。一般読者の批判的読解力Ⅱリテラシーの底上げに貢献した。時評にはこの二方面の「使命」が課せられている。

引用箇所はこう続く。「様々の傾向や流派を経過した視野の広汎な、公平と寛容と落付とを備へた大家」が時評を担うべきである。新人は「狭隘な党派心」に陥りやすい。ゆえに、時評担当には適さない。とりわけ、「公式主義を振り回す一派の人々の登場は禁物である」、と。時評は啓蒙装置としても機能する。そのように期待される（第二の「使命」）。それゆえ、「公平」や「寛容」が求められる。多くの場合、「公平」の実現は「大家」によって可能となる。河合はそういう。

しかしここには、ふたつの水準が混交している。意識的な操作かもしれないし、無意識ゆえかもしれない。ともあれ、現実／理想という別次元の問題を安易に合流させてしまっている。現実の時評には、公平でない批判機能が観察された。あるいは、公平でないリテラシー養成機能が。そのため、河合は公平な批判と公平な啓蒙を切望する。理想モデルを前提Ⅱ常識的に語る。その所作をおして、時評の現状を間接的に批判した。時評にはある傾向が確認される。とりわけ、河合が直接関係する論壇時評において。そこには、個別の「党派」性を帯びた論客たちが頻繁に

登場する。ときに、特定のイデオロギーを表明してはばからない。そうした時評から河合自身の論説が酷評を受けもした。その批判は公平でない(と河合は感じる)。たしかに、大学論や自由主義論などを主題とした時評に事例は簡単に見つかる。「使命」発言の背後には河合個人の私的利害が絡んでいる。

とすれば、私たちは以下のように整理しなおさなければならない。河合の行論において時評は、公平な読解養成装置たることを当為とし、その前提から公平さが要請されたのではない。逆である。自身も不利益をこうむる時評の現状を転載する必要に迫られていた。そこで公平さが導入された。そして、導入の根拠として啓蒙的たることが措定されたのだ。

すべては、時評担当者のセレクションへの疑念に端を発している。ならば、具体的にどういった論客たちが担当したのか。別途行なった作業の諸成果を参看しよう(大澤聡編『戦前期「論壇時評」集成』二〇一四・九)。記事一覧からはある傾向が浮かびあがる。

まず、『中央公論』の「論壇時評」。それはあきらかに担当再任を避けている。一九三一年三月号から順に、石濱知行、佐々弘雄、住谷悦治、大森義太郎、高橋正雄、阿部勇、杉森孝次郎、林要、平貞蔵と続く。社会／言論の複雑化に対応すべく観測点の分散化が試みられた。しかし、重複の回避は短期間(九ヶ月)の連載に終わったからこそ実現したにすぎない。『東京朝日新聞』『読売新聞』の連載は六年以上におよぶ。しだいに未踏の書き手がかぎられてくる。再用は不可避だ。いささか粗暴な手続きではあるが、両紙の論壇時評のデータを統合し、担当回数が多い論者をピックアップする。こうだ。

- 6回 向坂逸郎(朝4/読2)、戸坂潤(朝3/読3)
- 5回 大森義太郎(朝2/読3)、室伏高信(朝1/読4)
- 4回 佐々弘雄(朝1/読3)、石濱知行(朝1/読3)、長谷川如是閑(朝2/読2)、
山川均(朝3/読1)、栗生武夫(朝1/読3)

* ()内は合計回数の内訳
「朝」||『東京朝日新聞』/「読」||『読売新聞』

向坂や戸坂、大森、佐々、石濱らが上位を占める。いずれも本書に頻出する批評家だ。彼らは早い段階で官学アカデミズムから排斥される。そして、論壇ジャーナリズムに活路を見出した。マルクス主義を理論的な備給点としつつ、膨張したジャーナリズムの要求を先取的に汲み取る。たちまち論壇の寵児となった。準備の煩雑さゆえ、既存の書き手は時評の執筆依頼を受けたがらない。だが、新人の彼らに対処していく。卓越した情報処理能力をもって。一方で、上位には室伏や長谷川ら年長世代も食い込む。彼らは大正期の文明批評家の系譜に列なる。そうした感性を基盤に時代診断を提示した。本論で整理したとおりだ。

前者は河合のいう「公式主義を振り回す一派の人々」に該当する。後者は「公平と寛容と落付とを備へた大家」に。この上位構成はそのまま一九三〇年前後の論壇の明快な縮図になっている。細部に拘泥した静態的分析に終始する前者(「論壇批評家の勃興」と、時代全体を見とおし牽引していく思想を理想とする、後者(「文明批評家のリヴァイヴァル」と)。後者は旧来型の批評理念を尺度に前者スタイルの卑近性を批判し続けた。これもすでに見たとおりだ。しかし、批判も虚しく、

論壇のヘゲモニーは着実に移行していく。後者から前者へと。むしろ、だからこそ後者は執拗に批判したのである。この移行は不可逆だ。転機にあつて、時評の担当は前者に傾斜した。この傾向は論壇ジャーナリズム全域のヘゲモニーシフトを促進する原動となったはずだ。なぜか。

序章で見た三木清「批評の生理と病理」(前掲)の議論を想起したい。一般読者のあいだで、時評類が手軽なマニュアルとして活用される。彼らは原典にあたらない。ときに、専門的読者(批評家)や「プロフェツサー」までもが積極的に利用している。その結果、特定の個人的な判断が拡散する。しだいに公共性を獲得していく。効率化を優先する読書環境が「精神のオートマテイズム」をもたらしてしまう。

ことほどさように、時評には言論空間全体の趨勢をも少なからず規定する力が備わっている。ならば、特定の立場に依拠した論客たちが連続的に時評を担当する、その態勢の効果はあきらかだろう。知的公共圏の集団的心性は彼らの思想に誘導されるはずだ(評者自身の意図とは別に生じる効果)。河合の苛立ちはそれゆえでもある。だからこそ、「公平」を求めた。あるいは、それを実現する「大家」による担当を。

河合にかぎらない。公平さの要求は広く吐露された。たとえば、見多厚二「大森義太郎氏の時評」(一九三四・七)は、「社会時評」の条件として「社会現象を公正なる眼で批評」⁸¹することを掲げる。そのうえで、大森の時評の偏向性を批判する。「社会時評を大森義太郎に書かせることは無益にして有害」とまでいいきる。時評の現状を強く否定した。その常套として、やはり「公正」「公平」という尺度が召喚されるのだ。

むしろ、ここで重要なのは、公平な言論の不可能性をことさらに強調する応対などではない

——単独の評者に社会／論壇全域を監視させること自体がそもそも難題にすぎる、といった論議はつねに存在した。そうした水準で議論を進めるならば、肝心な部分を捉え損ねてしまう。そうではなく、なぜかくも「公平」＝理想が叫ばれるのか、この点に照準を設定しなおす作業が不可欠となる。次章以降の副次的な課題として申し送りしておこう。

有名の誘惑に絡め取られはじめている——それどころか、この数十頁あとには字義どおりインデックスとしての「人名索引」が挿掲されてしまうだろう。これは「人物論」の罫だ。私たちは別の方法で集団性の理論的考察にむかわなければならない。しかし、それはおそらく実践のなかでのみ可能となるだろう。戸坂や大宅、あるいは他の多くの批評家たちがそうしたように。したがって、新たな課題を別のプロジェクトへと転送し、このあたりで本書を閉じることにしよう。

註

序章

- 1 — 大宅壮一「文学の時代的必然性」『文学時代』一九三〇年一月号、一六一—一七頁。ただし、引用中の「発展」は初出時には「発表」となっている。ここでは、単行本収録時のより自然な表記を採用した(大宅壮一『モダン層とモダン相』大鳳閣書房、一九三〇年八月)。なお、収録時に「時代色と文学」と改題。
- 2 — 大宅壮一「文壇ギルドの解体期——大正十五年に於ける我国チャーナリズムの一断面」(『新潮』一九二六年一二月号)。ちなみに、大宅は一九二六年初頭から『新潮』に無署名や署名入りで寄稿している。それ以前にも発表の経験があった。にもかかわらず、一般的には、この論考が大宅の『デビュー論文』であると注記される。それは、文壇に「大宅壮一」という固有名が広く流通する契機となった時点の確定を意味しているにすぎない。
- 3 — 白柳秀湖「商業主義に同化した文壇」(『新潮』一九二六年七月号)は、大宅に数ヶ月先行して文壇に「ギルド」という比喩を使用していた(二二四頁)。この件は、前田愛「大正後期通俗小説の展開(上)——婦人雑誌の読者層」『文学』一九六八年六月号)によってすでに指摘されている(三二—三三頁)。
- 4 — 大宅壮一「文壇ギルドの解体期(前掲)」、七九頁。「有名」は原文では『有名』と表記されている。便宜上あらためた。
- 5 — 大宅壮一「第三期」文壇論(『経済往来』一九三二年七月号)、一七二頁。
- 6 — 三木清「文壇と論壇」(『鉄塔』一九三二年九月号)は、次のように記す(一五頁)。「或る論者に云はせると、文壇といふものはや崩壊し衰滅しつつある。文壇といふ特殊な存在は次第にチャーナリズムに征服され或は解消されつつあるといふのである」。いうまでもなく大宅壮一の一連の議論を指している。
- 7 — 大宅壮一「文壇に対する資本の攻勢(上)」(『読売新聞』一九二八年九月一日)、四頁。
- 8 — 大宅壮一「文学の時代的必然性(前掲)」、一六頁。

- 9 — 大宅壮一「ブラック街の文壇を観る」(『新潮』一九二九年六月号)、八〇頁。
- 10 — 大宅壮一「事実と技術」(『東京朝日新聞』一九二九年五月一七日期刊)、七面。
- 11 — 別の機会に詳細に論じた。大澤聡「脱神聖化する文学領域——大宅壮一の文壇ジャーナリズム論」(『日本文学』二〇〇八年一月号)を参照のこと。
- 12 — 大熊信行「文学のための経済学(十講) 第三講——時間配分の自由」(『都新聞』一九三三年五月二五日)、一面。
- 13 — 大熊信行「文学のための経済学(十講) 第一講——閑暇と文学」(『都新聞』一九三三年五月二三日)、一面。そのうちこの語を反復した。
- 14 — 大熊信行「文学のための経済学(十講) (『都新聞』一九三三年五月二三日)六月一日)は、大熊信行「文学のための経済学」(春秋社、一九三三年一月)に収録。晩年、大熊信行「芸術経済学」(潮出版社、一九七四年七月)に再録するにあたり、「配分」というタームを執拗に「資源配分」と書き換えている。他の用語にもかなりの加筆跡が認められる。この事後的な修正ゆえに、数箇所が叙述上の時代的齟齬を引き起こしてしまっている。
- 15 — 青野季吉「現代ジャーナリズムと文学」(『行動』一九三五年八月号)、一一五頁。「世に認められるといふことは、新聞のチャンネルを通じてでなければ不可能である」と続ける。
- 16 — 中井正一「『壇』の解体」(『大阪朝日新聞』一九三二年一月一九日期刊)、六面。
- 17 — 中井正一「文壇の性格——『壇』の解体について(その二)」(『大阪朝日新聞』一九三二年一月二〇日期刊)、六面。
- 18 — ニューメディア脅威論に対する否定的な意見も存在した。民法学者の末川博はエッセイ「現代ジャーナリズム漫語」(『中央公論』一九三五年一月号)のなかで以下のように述べている。たしかに、大半のニュースは新興メディアのラジオから摂取できる。しかし、その際の取捨選択には困難がともなう。時間的拘束も強い。それゆえ、かえって印刷メディアの利点が浮上してくる。「自分で読みたいときに読め、また読むものを勝手に選択できるといふところに、紙に印刷されてある物の有り難味がある」(二〇一頁)。末川はラジオと印刷媒体(新聞・雑誌・書籍)は競合しないと見る。中心的な役割が異なるからだ。末川の議論は次のことを示唆しよう。すなわち、他メディアの新規登場により既存メディアの輪郭が明確になるということ。
- 19 — 大熊信行「時間配分の自由」(前掲)、一面。
- 20 — 近年の成果に、山本芳明「カネと文学——日本近代文学の経済史」(新潮社、二〇一三年三月)などがある。
- 21 — 近年の成果に、浅岡邦雄(著者)の出版史——権利と報酬をめぐる近代(森話社、二〇〇九年二月)などがある。
- 22 — たとえば、永嶺重敏「雑誌と読者の近代」(日本エディタースクール出版部、一九九七年七月)、同「モダン都市の読書空間」(同、二〇〇一年三月)など。
- 23 — マーシャル・マクルーハン(栗原裕、河本仲聖訳)『メディア論——人間の拡張の諸相』(みすず書房、一九八七年七月)。当該プロローグを考察した近年の良質な成果に、門林岳史「ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン?——感性論的メディア論」(NTT出版、二〇〇九年九月)がある。
- 24 — S・V・C『新聞批判』(大畑書店、一九三三年四月)は、序文「匿名出版について」のなかで次のようにいう(一一二頁)。「新聞の主張は公正なもの、報道は正確なもの」という誤解が蔓延している。と。しかし、新聞も「商品」にすぎない。新聞批評の「流行」はそのことさらに強調の結果だ。詳細は第一章に譲ろう。
- 25 — 中井正一「文壇の性格」(前掲)、六面。
- 26 — 大熊信行「文学のための経済学(十講) 第七講——工芸品としての書物」(『都新聞』一九三三年五月二九日)、
- 27 — 大熊信行「文学のための経済学(十講) 第六講——文学の代価」(『都新聞』一九三三年五月二八日)、一面。
- 28 — 大熊信行「工芸品としての書物」(前掲)、一面。
- 29 — 戸坂潤「新聞の問題」(戸坂潤「現代のための哲学」大畑書店、一九三三年二月、初出未詳)、二〇二—二〇三頁。
- 30 — ロジェ・シャルチエ(福井憲彦訳)『読書の文化史——テキスト・書物・読解』(新曜社、一九九二年二月)など。
- 31 — 室伏高信「論壇時評」(一) 二分の一ジャーナリズムの横行」(『読売新聞』一九三二年二月二五日期刊)、四面。
- 32 — 永嶺重敏「円本の誕生と「普通国民」」(『叢書 現代のメディアとジャーナリズム』第4巻 大衆文化とメディア)「ミネルヴァ書房、二〇一〇年八月)は、この現象を「ブレ円本」ブーム」と位置づける。
- 33 — 近年の実証的研究の成果として、庄司達也・中沢弥・山岸郁子編『改造社のメディア戦略』(双文社出版、二〇一三年二月)をあげておく。
- 34 — 無署名「世界一の『現代日本文学全集』出づ」(『現代日本文学全集 予約募集』内容見本「改造社」、四頁。配布は一九二六年半ば以降と推定される。同文は『改造』一九二六年二月号にも再利用されている)巻末

頁)。

35 菊池寛「文藝時評」(『中央公論』一九二七年一月号)、二六七頁。「営利的企画」であるがゆえに、「人選の如きも、文学的名分は第二位であり、市場価値が第一であることは、当然である」と理解を示してもいる(二六六頁)。

36 無署名「世界一の『現代日本文学全集』出づ」(前掲)、良書を廉価で広範囲に普及させる点において「出版界の一大革命」を自負する(二三頁)。

37 無署名「文藝春秋」(『文藝春秋』一九二七年三月号)、二三頁。

38 大宅壮一「出版革命の勝利者」(『中央公論』一九二八年一月号)、二四六頁。

39 小林秀雄「様々なる意匠(文藝評論二等当選)」(『改造』一九二九年九月号)は、「大衆文藝」を次のように定義している(一一二頁)。「人間の娯楽を取扱ふ文学ではない、人間の娯楽として取扱はれる文学である」。なお、「大衆文学」なる呼称は円本ブームの最中、「現代大衆文学全集」全六〇巻(平凡社、一九二七年五月—三二年三月)によって定着を見た。

40 「文藝講座 大要」(『文藝春秋』一九二四年七月号)は、「平易なる紙上文科大学の創設」を謳う(広告頁)。「文藝春秋三十五年史稿」(文藝春秋新社、一九五九年四月)

46 同前、二三頁。

47 ジャーナリズムを討議した座談会記事も急増している。たとえば、「各雑誌評判座談会」(『文藝春秋』一九二九年一月号)、「出版界批判座談会」(同、一九二九年六月号)など。

48 「総合チャーターナリズム講座」全二巻(内外社、一九三〇—三一年)。

49 大澤聡「雑誌『経済往来』の履歴——誌面構成と編集体制」(『メディア史研究』第二五号、二〇〇九年五月)ではこのプロセスを詳述した。

50 新居格「現代高級雑誌論」(『経済往来』一九三〇年一月号)、一〇七頁。

51 無署名「雑誌界の二代表——『中央公論』と『改造』」(『読売新聞』一九三一年一月一日朝刊)、三面。

52 平林初之輔「文藝時評 文藝は進化するか、その他」(『新潮』一九三〇年六月号)は、「文学作品が今日完全に商品化してゐることは事実だ」と前提したうえでこういう(九八頁)。「プロレタリア作品も藝術派の作品も出版資本家にとつては、同じ角度から眺められる。「商品」としての機能的等価性を指摘している。出版社は原則として「営利」にしたがう。こうした「角度」に対して「イデオロギー」批判はおよそ意味をなさない。

月)は、同講座についてこう記載している(五二頁)。

「文藝講座」の名称は菊池寛の創案になるもので「何々講義録」に飽きていた読者に新鮮な印象を与え、以降講義録は姿を消して所謂インテリ向きの講座の名が、その種の出版物を風靡するに至つた。「講義録」から「講座」ものへ。この転換の意義についてはメディア史や教育社会学を含め多角的な検討を要する。

41 「本誌の値下げと十倍拡張運動」(『改造』一九二七年二月号)、二頁。

42 無署名「編輯後記」(『経済往来』一九二七年四月号)、一八六頁。

43 総合雑誌の略史としては、「総合雑誌太平記」(『中央公論』一九七五年一月号)や「総合雑誌の研究」(『流動』一九七九年七月号)などの特集が存在する。この種の特集や論議が一九七〇年代に集中していることはあらためて注目されてよい。論壇の衰退が連呼されるなかで歴史的検証が要請されていた。その事実の一端をうかがわせる。

44 田中紀行「論壇ジャーナリズムの成立」(『近代日本文化論』4 知識人・岩波書店、一九九九年九月)が論壇の形成過程をくくコンパクトに概観している。

45 三木清「批評の生理と病理」(『改造』一九三二年二月号)、二二頁。

53 新居格「現代高級雑誌論」(前掲)、一〇八頁。

54 同前、一〇七頁。

55 論壇の成立を大正期中盤に認める史的認識は数多く存在する。たとえば、山田宗睦「論壇の機能と学問の役割」(『展望』一九六五年八月号)は、「論壇が形成されたのは、大正デモクラシーの時である」と述べる(一〇九頁)。また、山田宗睦・丸山邦男・松本健一「なぜ論壇は崩壊したか」(『現代の眼』一九七九年八月号)も同様の前提で対話を進行する。ただし、論壇時評が戦後に成立したと誤認している(第1章参照)。

56 「日本評論」創刊号の表紙には、大きく「高級大衆雑誌」と印字されている。

57 関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進編「雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧」(光和堂、一九七七年五月)は以下の定説を記している(一一〇頁)。「『改造』が多くの半インテリを読者に持ったのは、その掲載の論文が難解で、難解ゆえにアクセサリーの役割をはたしたという皮肉な見方もある。こうした評価は一九九〇年代の『批評空間』にもそのまま適合する。知的なメディアの一面を的確に言い表している。大熊信行「文学のための経済学」(十講) 第八講——愛書家と読書家」(『都新聞』一九三三年五月三〇日)、一面。

59—無署名「出版界」(『出版年鑑 昭和九年版』東京堂、一九三四年六月)、八頁。同記事は「婦人雑誌」や「児童雑誌」、あるいは「大衆娯楽雑誌」の隆盛も数的データとともに記録している。「昭和八年度は近年になく雑誌界は活況を呈した。まさに、同年九月の二週間に「雑誌週間」と銘打ち、関連団体が積極的に活動した。そのことも象徴的である(翌年も第二回を開催)。「文藝復興」は文芸領域だけを見ても説明がつかない。

60—『出版年鑑』各年度版(東京堂)を利用して、さらに詳細な変化の過程を記録しておく。一九三〇年から三二年までは各誌とも変化なし。続く一九三三年の「昭和八年版」の段階で、『文藝春秋』の分類が「政治・社会・評論」と変化。ほかは変わらない。なお、この年から簡易な分類だけではなく各誌の性格の紹介コメントも付記される。「経済往来」は「財政経済時事問題を主にした評論雑誌(八三〇頁)、『文藝春秋』は「随筆と文藝を特色に政治社会思想等に亘る一般雑誌(八二九頁)、『中央公論』「改造」はともに「政治社会思想文藝等に亘る一般的な評論雑誌(前者八二八頁、後者八二四頁)」。そして、翌年の「昭和九年版」ではすべて「政治・社会・評論(総合雑誌)」とされる。紹介も四誌ともに「政治財政経済時事文藝等に亘る総合雑誌」と統一。ちなみに、当該年版の「出版界一年史」

欄の「雑誌界」項目は状況をこう整理している(八頁)。「総合雑誌では「中央公論」、「改造」、「文藝春秋」の鼎立してあることとも変わらず、「経済往来」がこれに食ひ込[ま]うと努力してある」。

61—いくらでも例は挙げられる。たとえば、「総合雑誌・週刊雑誌(城戸又一編)マス・コミュニケーション講座」第三巻、河出書房、一九五四年一月、三三二頁。戦前からそう遠くない時期においてさえすでにそうした解説が行なわれていたことに注意したい。起源が早々に忘却されている。

62—新居格「総合雑誌論」(『日本評論』一九三五年一月号)、三四二頁。

63—中井正一「文壇の性格」(前掲)、六面。

64—新居格「総合雑誌論」(前掲)、三四二頁。

65—杉山平助「文藝時評」(一)、「文藝春秋」今昔(『読売新聞』一九三一年三月二七日、八面)。

66—この時期、各誌に編集批評が頻りに掲載された。『経済往来』/『日本評論』は誌名変更を挟む一九三五年をとおして、「雑誌時評」(雑誌批判)なる連載枠を設置している。毎回、個別雑誌や雑誌ジャンルがタイトルに掲げられる。大宅壮一「『中央公論』批判(雑誌批判)」(『経済往来』一九三五年三月号)、宇野浩二「菊池寛と『文藝春秋』——主として菊池寛について(雑誌時評)」(『同』五月号)、田町比天雄「主婦の友」はなぜ売れるか(雑誌時評)」(『同』六月号)、A・B・C「改造」論——雑誌批判」(『同』七月号 *目次では「雑誌時評」、大宅壮一「講談社チャールリズムに挑戦する(雑誌時評)」(『同』八月号)、村山知義「週刊朝日とサンデー毎日(雑誌時評)」(『同』九月号)、勝本清一郎「文学雑誌論(雑誌時評)」(『日本評論』一〇月号)、新居格「総合雑誌論」(前掲)。この翌月からは青野季吉らによる連載「ジャーナリスト列伝」が開始される。各誌の編集方針が分析の俎上にのせられた。『日本評論』が論壇・文壇ジャーナリズム内にポジションを獲得するためのリサーチにもなっている。そのプロセスが自誌記事として公開される。自己言及性に満ちた試みだった。

67—大宅壮一「文壇的人気の分析」(『行動』一九三五年四月号)、二六四頁。

68—匿名の編集者たちによる座談会である「円卓会議 編輯者の見た作家」(『文藝通信』一九三三年一〇月号)のなかで、杉山平助はこう評されている(四二頁)。「雑誌の編輯なんかをあれだけ見て呉れる人はない」。

69—なかでも、大宅壮一による編集批評は商品化論とも緊密に連絡しあう。そして、「脱神聖化」というひとつの時代現象がありとあらゆる角度から観測されていく。

その徹底した多面性において大宅は卓抜していた。ゆえに、大宅の散乱したテキスト群を逐一リンクさせつつ解説する作業は、当時の言論状況の全体像を漸近的に復元することを可能にしてくれる。本書が大宅のテキストをもっとも多く参照する理由でもある。しかし、「大宅壮一」に特権的地位を与える意図はここにはない。言及頻度の高さはあくまでテキストの参照利便性を優先した結果にすぎない。

70—杉山平助「匿名の流行」(水川烈「評論と随筆 春風を斬る」(大畑書店、一九三三年五月)、一一三頁)。

71—勝本清一郎「現代文藝批評家論」(『中央公論』一九三五年六月号)、二七六—二七七頁。

72—川端康成「文藝時評」(3)「信念と若い無謀さで」(『読売新聞』一九三三年一月一日朝刊)、四面。

73—矢崎弾「わが批判者に与ふ——「観念」断定の不安」(『行動の文学』について)矢崎弾「新文学の環境」(紀伊國屋出版部、一九三四年一月)、八七頁。初出未確認。文末の記載によると、欄筆は一九三四年七月六日同趣旨のテキストとして、同「新文学精神の環境」に就いて——文藝時評「改造」一九三四年七月号)もある。その後も、同「新文学の暗示する問題——専ら現象の環境に忠実に」(『星座』一九三六年六月号)など、「新文学」と「環境」を組合せ論じる。「環境」の洗い出し

は「新文学」の前提だという認識がうかがえる。そのモチーフは本書も十分共有しているはずだ。

74 — 谷川徹三『文学の周囲』(岩波書店、一九三六年一月)。

75 — 大熊信行『文学のための経済学』(前掲)、七二頁。

76 — 林房雄『現代文藝評論家総評』(『文藝』一九三四年一月号)は、「雑文」を「フイェトン」||「新聞雑誌向き興味読物」と定義している(六九頁)。

77 — じつところ、全集のような体系性を備えたストックメディアでさえ例外ではありえない。円本群もプームの終焉を待たず、さらなる安値で売り飛ばされた。過剰飽和の結果、ソッキヤや古書市場にも大量流出する。

第1章

1 — 戸坂潤『論壇時評』(一) 批評発表の困難相——論壇時評は疑問であるか(『読売新聞』一九三六年九月一日朝刊)、五面。

2 — 同前、五面。

3 — 「演藝時評」など他種時評欄も同号以降に設置された。やや遅れて、「経済時評」や「映画時評」も単発で掲載。それらとの兼ねあいから、ジャンル(「社会」)の限定を明示する必要が生じた。こうした経緯による改題だったと考えられる。なお、「文藝時評」は「内外時事

評論」創設時にすでに存在した。担当は主に正宗白鳥だった。

4 — 白柳秀湖「社会時評の兄弟分」(茂木実編『高島素之先生の思想と人物——急進愛国主義の理論的根拠』津久井書店、一九三〇年九月)が、社会時評の起源に言及している(一五八—一六〇頁)。一般的にそれは高島素之の考案とされてきた——じつさい、広汎に認知させたのは高島だ。それを白柳は補正する。「僕の発明」だ、と。自身が主宰・編集した雑誌『実生活』(一九一六年一〇月創刊)に「社会時評」欄を設置。「毎号新聞紙の三面記事、若しくは街頭に現はれる種々相に対する自分の観察」を記したという。しばらくして、この試みに共鳴した高島との匿名「合作」形式へと移行した。後年、高島は他誌の社会時評で名を馳せることになる。だが、初出をめぐる諸事情は一切問題ではない。大正期初頭の時点ですでに同欄は存在した。そして、一九二〇年代にはジャンル名として広く定着していた。本章ではその事実だけおさえておけば足りる。

に、「経済往来」は、「中央公論」「改造」や「文藝春秋」などに遅れて創刊された。先行他誌の企画やデザインを模倣することで自覚的に「綜合雑誌」スタイルを確立していく。

6 — 高橋正雄『論壇時評——政府の整理策をめぐって』(『中央公論』一九三二年七月号)、一五三頁。

7 — 住谷悦治『論壇時評』(『中央公論』一九三一年五月号)、林要(『論壇時評』(同)一九三一年一〇月号)。

8 — 佐々弘雄『論壇時評』(『中央公論』一九三一年四月号)、一四五頁。

9 — 同前、一四一頁。

10 — 室伏高信『論壇時評』(一) 二分の一ジャアナリズムの横行(『読売新聞』一九三二年二月二五朝刊)、四面。ただし厳密には、この発言は次節で確認する状況を背景としている。

11 — 高橋正雄『論壇時評』(前掲)、一六〇頁。

12 — 大森義太郎『論壇時評——學術雑誌の正体』(『中央公論』一九三一年六月号)。論争の背景については、竹内洋『大学という病——東大紛擾と教授群像』(中央公論新社、二〇〇一年一〇月)などに詳しい。

13 — 平貞蔵『論壇時評——労働党政府の壊滅を中心として』(『中央公論』一九三一年一月号)。

14 — 精確に記せば、『読売新聞』「論壇時評」は一九三二年

二月の室伏担当回のと半年の不在期間を挟む。そして、八月三〇日から九月二日にかけて掲載された石濱知行の担当回より再開。その後、一九三三年に入って以降は完全に定着した。

15 — そうと宣告せぬまま「論壇時評」が終了した『中央公論』一九三一年一月号は一〇月一九日に発売されている(『東京朝日新聞』同日朝刊の一面に広告が掲載され、「今朝発売!!」と謳う。『読売新聞』も同日同様)。

『東京朝日新聞』「論壇時評」はその二〇日後の二月八日に開始した。事後的に終了が判明する一二月号(一月一九日発売)を待ってはいない。したがって、ここに直接の因果関係を見ることはできない。

16 — 大澤聡編『戦前期「論壇時評」集成——1931-1936年』(金沢文圃閣、二〇一四年九月)では、『東京朝日新聞』『読売新聞』両紙の論壇時評記事を完全複製収録した。

また、大澤聡「論壇とリテラシー——付・戦前期「論壇時評」欄一覽」(『リテラシー史研究』第二号、二〇〇九年一月)では表題をリスト化した。

17 — 林發未夫「六月の論壇(一) 自由主義者の占拠」(『東京朝日新聞』一九三四年六月二朝刊)、九面。

18 — 大津伝書「匿名批評界のこと」(『作品』一九三六年四月号)、四二頁。

19 — 青野季吉「文学五十年 四十六回 二・二六事件のころ

——匿名評論の時代という半面(『東京新聞』一九五七年六月七日夕刊)が「豆戦艦」設置の経緯を回想している(八面)。

20 — 高橋亀吉(論壇月評「二」) 雑誌編輯者へ——根本的改革の必要(『東京朝日新聞』一九三三年六月一日朝刊、九面)。

21 — 高橋亀吉(論壇月評「四」) 無批判な焼直し——インフレーションについて(下)(『東京朝日新聞』一九三三年六月三日朝刊)では、文脈の可視化作業を行なっている(九面)。経済方面のガイドとして有益な時評に仕上がる。たとえば、「当面におけるインフレーションの意味につき、より真相に近い理解を得んとする人々は、まづ、東洋経済及び経済情報社の説、高島佐一郎氏(『経済往来』)の論文等を見て、然る後に、以上を批判する意味によつて、笠(信太郎)氏等の論文を見られるがよいと思ふ」といった具合に。

22 — 大森義太郎(二月の論壇「五」) 文学的論文(『東京朝日新聞』一九三五年二月六日朝刊)、九面。

23 — 谷川徹三(論壇月評「三」) 下らぬ巻頭論文——哲学的論文を採り上げよ(『東京朝日新聞』一九三二年五月五日朝刊)、五面。

24 — 大森義太郎(二月の論壇「一」) 学術的な論文(『東京朝日新聞』一九三五年二月二日朝刊)、一三一面。

25 — かねてより、大森はこの主張をくりかえしていた。大森義太郎「十月号雑誌批判(4)」(『読売新聞』一九二九年一月三日朝刊)では、文芸誌である『新潮』にまで学術論文を掲載するよう提言する(四面)。

26 — 室伏高信(二月の論壇「一」) 素人の登場——新しいジャアナリズム(『東京朝日新聞』一九三四年二月四日朝刊)、九面。

27 — 室伏高信(二つの「ジャアナリズム」の横行(前掲)、四面)。

28 — 室伏高信「評論壇の昂揚——偉大なる世界観を持つもの」の出現を(下)(『読売新聞』一九三三年三月一日朝刊)四面。

29 — 室伏高信「チャーナリズムとセンセシヨナリズム」(『総合チャーナリズム講座 第五巻』内外社、一九三一年二月)、一六頁。室伏高信(論壇時評「1」) 時の論理——予言とジャアナリズム(『読売新聞』一九三四年三月三日朝刊)でも、「雑誌ジャアナリズムと時代の蔽ひがたい遊離」を嘆く(四面)。いわく、「ジャアナリズムは常に一個の予言でなければならぬ」と。

30 — ただし、批判された当の若手論客たちも現状分析においては同様の認識を示している。たとえば、佐々弘雄「論壇時評(2)」チャーナリズムの動向を示す現代評

論の分野(『読売新聞』一九三二年一月六日朝刊)。以下のように述べる(四面)。批評は四タイプに区分できる。すなわち、「指導的の意味をもつもの」、「批判的の論文」、「解説的の論文」、「興味的読物」の四つに。現在はこのうち「指導的」論文に乏しい。「デモクラシ」時代の吉野博士、無産政党初期の大山、山川氏らの論文の如きは殆どない。とはいえ、そうした認識自体が「小器用」な整理に裏づけられたものでしかありえない、ともいえてしまう。ここに次世代批評家の苦境があった。

31 — こうしたモード変換を前に、室伏の言辭は効力をもたがたかった。ところがその後、それをとりまく環境に変化が起こる。一九三五年一〇月、『経済往来』は「日本評論」と改題する。本格的な総合雑誌へと成長を遂げた。改題前後の時期に室伏は同誌主幹として招聘される。そして、編集に関与していく。最終的に同誌は、『改造』『中央公論』と拮抗しうる言論的磁場を形成するにいたった。戦況の進展が室伏的な批評スタイルを再び要請したのだ。室伏は批評のみならず編集作業をおして嚮導的实践を展開した。

32 — 長谷川如是閑「技術を捨て大局を立て——現代評論壇に与ふ」(『読売新聞』一九三三年四月二七日朝刊)、四面。表題のとおり「技術」偏重に苦言を呈す。

33 — 廣見温「哲学時評(思想)」一九三二年四月号)、九七頁。なお、一九二一年一〇月創刊の『思想』における「時評」の初出例である。その後、同欄は一九三三年四月号まで継続した。担当者は廣見のほか、高山岩男、本多謙三、戸坂潤。一九三三年五月号以降は「思想時評」と改題、休載を挟みつつ三六年九月号まで続く。担当者は初回の唐木順三を除いて基本的には高山岩男、三木清「批評の生理と病理」(『改造』一九三二年二月号)、二二頁。

34 — 三木清「批評の生理と病理」(『改造』一九三二年二月号)、二二頁。

35 — 「医学時評」欄なども一般誌に散見された。たとえば、佐藤秀三(今日の医学)、『中央公論』一九三三年一月号)、同「結核治療の研究」(同)一九三三年四月号)。「S・V・C」は鈴木茂三郎による匿名であった。鈴木は媒体を問わずこの記号筆名を使用した(詳細は第5章)。なお同欄は、担当者や表題に単発的なゆれを含みながらも、基本的にはS・V・C「新聞紙匿名月評」として一九三四年一月まで連載される(その後別担当者により継続。連載前半は大幅に加筆・再編のうえ、S・V・C「新聞批判」(大畑書店、一九三三年四月)に収録)。

36 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

37 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

38 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

39 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

40 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

41 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

42 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

43 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

44 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

45 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

46 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

47 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

48 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

49 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

50 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

51 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

52 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

53 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

54 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

55 — S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年四月号)は連載一年を振り返り、「此の月評についてであらにもこちらにも新聞批判がおこなはれ」たと指摘し

ている(一七九頁)。

38—石濱知行「論壇の動き」[3] 新聞が批評の題目となつた歳(『読売新聞』一九三二年二月一〇日朝刊)、四面。

39—戸坂潤「新聞の問題」(戸坂潤「現代のための哲学」大畑書店、一九三三年二月、初出未詳)、一九九頁。続けて、「一九三二年の夏以来、諸評論雑誌は期せずして同じく新聞といふテーマを取り上げている」ともいつてている。なお、戸坂がそう観察した一九三三年頃から、新聞論は以前と異なる意味を帯びはじめる。やはり戸坂を参照しよう。論説「新聞の本質的批判」(『現代新聞批判』一九三四年三月一日号)では以下のように経緯を説明した(二頁)。一九三三年、社会はファシズム台頭を見た。それに接して、各紙は「見え透いた様々の順応態度」を示した。その結果、一定の「信用」を喪失する。ここに、「新聞批判」が課題として浮上したのだ。ただし、戸坂自身はそうした言説はいずれも「局所的な、悪い意味に於けるジャーナリスト的な」ものにすぎず、「組織的な新聞論」ではないと評定することも忘れない。

40—馬場恒吾「新聞時評」(『中央公論』一九三二年九月号)、一八三頁。

41—実際には、ここに「匿名」というもうひとつ別の問題号、三四頁。

47—中村光夫「文芸と新聞」(『新聞研究』一九六六年九月号)は、昭和初年代に頻発した文学論争のメインステージとして新聞文芸欄をあげている(一頁)。文芸誌に載った批評文への反駁が文芸欄に掲載される。「新聞と雑誌の間に論争の交流があった」。学芸/文芸欄と各種雑誌とが緊密に「交流」しあい、ひとつの空間を構成していた。それが論壇や文壇の心象と嵌合する。S・V・C「新聞紙匿名月評」(『文藝春秋』一九三三年一月号)、一五六—一五九頁。

49—馬場恒吾「十二月の論壇四新聞時評を評す——小泉氏の西園寺公伝」(『東京朝日新聞』一九三二年二月四日朝刊)、九面。

50—新居格「論壇時評」(3) 新聞批評の批評——最近雑誌に観る傾向の(『読売新聞』一九三二年二月六日朝刊)、四面。

51—戸坂潤「批評発表の困難相」(前掲)、五面。

52—次の二点に注意しよう。①四大総合雑誌のなかでもっとも周縁的な媒体に流れついたこと。②それが匿名批評と接合することで可能となったこと。もはや論壇時評は転質してしまっている。

53—大澤聡「複製装置としての『東亜協同体』論——三木清と船山信一」(石井知章・小林英夫・米谷匡史編「一

系が絡む。金剛登「壁評論文芸欄批判」(『読売新聞』一九三四年三月二五日朝刊)はこう伝える(四面)。文学領域では、「新聞と雑誌の匿名批判の対抗競技が始まった」と。しかし本章では、新聞学芸/文芸欄および雑誌における「匿名批判」の実態を扱う余裕がない。第5章を待つ。なお、「金剛登」は青野の匿名。青野季吉「二・二六事件のころ」(前掲)、一四頁。

42—三木清「批評の生理と病理」(前掲)、一四頁。

43—有澤廣巳「十月の論壇」(2) マルクス主義戦争論の検討(『東京朝日新聞』一九三二年一〇月四日朝刊)、九面。

44—笠信太郎「九月の論壇」(1) 新秋さびし——拾ひ忘れた問題(『東京朝日新聞』一九三三年八月三一日朝刊)、九面。

45—ただし、当時のジャーナリズム論の多くはコマージヤリズム論に集約されていた。とすれば、経済学方面の大熊信行や大森義太郎、向坂逸郎、あるいは数々のプロレタリア批評家たちがこの論議に着手した理由の一斑も想像されるだろう。が、本書ではそこに踏込むことはしない。むしろ、コマージヤリズム論から期せずしてはみ出した部分を掘り集める。そこにメディア論の予兆を見る。

46—茂倉逸平「新聞学藝欄時評」(『文藝』一九三四年六月九三〇年代のアジア社会論——「東亜協同体」論を中心とする言説空間の諸相)社会評論社、二〇一〇年二月)では、当該欄の活用事例にも触れた。哲学系批評家の船山信一は、一九三七年から三九年にかけて「日本評論」誌上で「匿名論壇時評」を連続担当している。その間、記号筆名を「P・C・L」「R・K・O」「B・B・C」の順に変更した。当該時期の同誌は各種時評欄(文芸/新聞/論壇/政治)を編集の中軸としていた。無署名「編輯後記」(『日本評論』一九三六年一〇月号)は、「本誌独特の匿名時評は益々異彩を放つて来た」と述べる(五二頁)。同欄の思想界における意義をたびたび強調している。自負と反響の一端がうかがえよう。

54—担当者は以下のとおり。樺俊雄(一九四〇年二—四月号)、戸田武雄(同年五—七月号)、牧俊一郎(同年九—十一月号)、阿南宏(同年十二月号)、船山信一(一九四一年一—四月号)、清水幾太郎(同年五月号)。同誌の他種時評も匿名率が高かった。それらも少し遅れて順次実名へと切替わっていく。

55—この時期、『中央公論』は「公論月評」なるコーナーを設置していた。そこには、「新聞」「政界」「科学」「ラジオ」など各領域の時評がそれぞれ四段組見開きで掲載された。その一環として、一九三九年の数ヶ月間、

「論壇」も扱っている。担当は、浅野晃(五月号)、清水幾太郎(六月号)、高桑純夫(七月号)、東條恒雄(八月号)。

56—戦後には再び雑誌評が開始される。それがのちに論壇時評として独立する。そう、本章で見た戦前の経緯を(意識せずして)忠実に踏襲することになるのだ。時評にかぎらない。あらゆる局面に同様の反復が抽出できる。戦後の新聞掲載の論壇時評については、道場親信「論壇時評」の戦後史——新聞と雑誌ジャーナリズムの交点(『駁台フォーラム』第一四号、一九九六年七月)が実証的に追跡している。また、辻村明「朝日新聞の版面——論壇時評」の偏向と欺瞞をつく(『諸君!』一九八二年一月号および二月号)は、イデオロギー批判に終始してはいるものの、詳細な情報を一覧に整理している。

57—雑誌掲載の論壇時評はその遅延性ゆえに「困難」を抱えていた(本章第3節)。だからこそ、発行リズムの異なる新聞へと媒体を移した。しかし、新聞の論壇時評にすら遅延を指摘する声も存在する。一木清蔵(『大波小波』新聞の論壇月評——存在価値に疑義あり)(『都新聞』一九三五年九月三〇日)は次のようにいう(一面)。「雑誌論説は時事テーマを扱う傾向にある。しかし、月刊ベースであり新聞報道の後塵を押す。誌面と

時間の余裕ゆえ詳細な分析が可能になるものの、既視感は否めない。論壇時評はそれをさらに遅れて論評することになる。一木は「存在価値」そのものに「疑義」を付す。この反復と遅延は論壇時評が宿命づけられた三次性に起因していた。

58—河合栄治郎「非常時局特別評論 第一回」(『日本評論』一九三七年七月号)、二二頁。

59—大澤聡編『戦前期「論壇時評」集成』(前掲)。

60—三木清「批評の生理と病理」(前掲)、二三頁。

61—見多厚二「左翼レヴュー・ガール 大森義太郎氏の時評」(『現代新聞批判』第一六号、一九三四年七月一日)、一一頁。

第2章

1—無署名「文壇時言」(『日本評論』一九三五年二月号)、二四八頁。

2—以下のように解釈することも可能だ。「問題」の不在が問題なのではない。批評テーマの横溢は前提として正しく把握されている。「問題」が連続的に発生しては消えていく。いつまでも「主流」が形成されない。問題視されるのは、この「主流」の不在なのだ、と。しかし、そのような解釈もここでの論旨になんら変更を要請するものではない。

3—小林秀雄「批評家の悪癖——文藝批評と作品(1)」(『大阪朝日新聞』一九三三年二月一日朝刊)、七一面。

4—小林秀雄「批評無用論——文壇の問題となつた文学的問題——批評と作品(その二)」(『大阪朝日新聞』一九三三年二月一日朝刊)、一四一面。

5—論争に先行して一九三二年末あたりから、文芸批評を主題とした文芸時評が増加している(この事実には何度か触れる)。小林秀雄の精力的な活動の衝撃もいくらかはこの傾向に影響を与えていよう。たとえば、深田久彌「批評の公平について——文藝時評」(『文藝春秋』一九三二年一月号)。

6—谷沢永一「文藝時評」(ことはじめ)(『新潮45』二〇〇二年一月号)が文芸時評の語史的な発生経緯を調査している。それにしたがえば、「文藝時評」という呼称そのものは、『太陽』一九〇一年一月号から翌年六月号にかけて掲載された「文藝時評」を嚆矢とする(命名者である大町桂月は最初の六ヶ月分を担当)。その後、『読売新聞』で正宗白鳥「文藝時評」が連載される。一九〇六年五月六日の開始だ。以降、定着を見た。一九二〇年代には様式としてすでに確立されていた。本書がカバーする時代においてそれは所与の前提だった。したがって、本書では通史的概説は行なわぬ。

10—杉山平助「文藝時評」(1) 月評果して不用か——その任務と効果」(『読売新聞』一九三三年八月一日朝刊)、四一面。

11—戸坂潤「反動期に於ける文学と哲学——文学主義の錯覚に就いて」(『文藝』一九三四年一〇月号)は、当該要素の肥大化を批判している(六頁)。「文藝批評」の大半は拡大された文壇時評に他ならない」と(傍点原文)。

12—『文藝時評大系』全七三巻十別巻五巻(二〇〇五—一〇年、ゆまに書房)は、「凡例」によれば収録基準を「創作月評」に設定している。創作の同時代評の蒐集に供せんとする意図が垣間見える(作品研究的目的)。じつさい、同大系により基礎調査は格段に容易になったは